281.53 Se12i

國立國會圖書館藏書

国立国会
27.12.19
図書館

284608

序

凡そ教育の要務は、道德を根本として知識に進み、彝倫を基礎として事業に及ぶに在り。若し夫れ根本立たず基礎成らずして、徒らに智識事業にのみ力を致さんか、是れ何ぞ樓閣を砂上に築くに異ならんや。顧みて現今社會の狀態を視るに、唯智識の末に汲々として肯て道德を顧みず、事業の末は營々として肯て彝倫を思はず、本末輕重地を換へんとす、豈に痛嘆に堪ふべけんや。故に我國今日社會の最も要求すべき者は、才智技藝の人に非ずして篤實力行の士なり、學問該博の人に非ずして人格高潔の士なり。而して此道德的修養を爲さんには、幼時の教學として最も重きを實踐道德に置き、其教訓を卑近切實なる活摸範に求めしめざる可らず。夫の父頑にして孝子現はれ、國亂れて忠臣出づるか如きは、是れ人世の變事に屬して、固より貴むべきものなりと雖も寧ろ平素に望む可らざるものなり。孟子曰く、道は邇きに

在りて諸れを遠きに求め、事は易きに在りて諸れを難きに求むと。是れ豈に世人の徒に高遠に馳せ、卑近を顧みざるを戒むる所以に非ずや。本會茲に見る所あり、去る明治四十年十月第十三回西濃聯合敎育會總會に於て、西濃人士中其の嘉言善行の風敎に資し、兒童の志氣を感奮せしむる所以の者を編輯して、閲讀に便し敎學の一端に供せんことを決議し、爾來年を經ること三星霜。各郡敎育會分擔して材料を蒐輯し、本會員大垣中學校敎諭大野鐵之助君に依囑して其執筆を請ひ、本會商議員再三審議校訂し、遂に本書を爲す。名けて修身資料西濃人物誌と云ふ。武勳赫々たる軍人あり、大節凜然たる志士あり、篤實精勵の學者あり、温恭貞淑の賢婦あり、孝子忠僕あり、敎育者實業家あり、其の爲す所一ならずと雖も、皆人中の精金美玉。之を讀む者誰れか感奮興起せざる者あらんや、況んや是等概ね吾人か既に見て之を知り、或は聞て之を知り、其の相去ると遠からず、且つ吾人の棲息行動する鄕土山川は、其の嘗て棲息行動せし鄕土山川にして、其の一切の歴史の終始したる所なるをや。吾人今其委曲を審かにする得、益〻風丰を欽仰して音容の眼前に髣髴たるを覺え、神交默會親しく提撕謦咳に接するの感想なきを得さるなり。只或は其人猶現に生存し、親炙する所あるを以て、所謂豫言者は其鄕里に尊ばれず。流俗或は其行爲の平易にして、自から規矩準繩に合するものを以て、凡庸耳目を動かすに足らずとなすか如きものあらん、或は其の言動の卓然特立するあるを以て、奇を好み名を釣るものと誤まるものなきに非さるべし。然れとも吾人は必しも完璧無瑕を求めす、要は唯其言行の勸善奬德の資に供すへきものあれは足れり、故に模範とすへき者は、直に之を採りて座右の銘となし、訓誡となすへきものは、直に之を採りて他山の石となすへきのみ。是れ即ち自己修德の最良方法にして、又善意を以て人を待ち、喜んて他人の美を成すを樂しむ所以の道なり。傳記の長短、及人物の採擇如何は、記

事資料の整否によりて然るのみ、何等軒輊する所あるに非ず。尚多數の傳記を採錄せんと欲せしも、材料不備の爲め再考を要するものありて、今盡く之を收むるを得ず。因て先づ本書を第一輯として刊行し、尋て累次編輯する所あらんとす。敢て文辭の彫琢を勉めず、只事實の正確にして、浮華誤謬の無からんことを期したりと雖も、誤聞又は遺漏なきに非ざるべし。そは謹んで大方諸彦の是正を俟つ。若し夫れ此書果してよく風致の一助となるを得は、本會の素志光榮之に加ふるものなしと謂ふへきのみ。聊か以て序となす。

明治四十三年二月

西濃聯合教育會長　吉村勝治

修身資料 西濃人物誌 第一輯

目次

一	飯沼慾齋	
二	伊藤傳右衛門	
三	今西判左衛門	
四	伊藤東太夫	[illegible]
五	伊藤又右衛門	一二
六	陸軍少將今津孝則	一四
七	原田種德	一六
八	戶田大榮院	一八
九	戶倉竹圃	二〇
一〇	所郁太郎	二二

蓬左文庫印

一一　小原鐵心　二五
一二　岡田將監　二九
一三　法學博士岡田朝太郎　三一
一四　脇坂文助　三四
一五　陸軍少將可兒春琳　三六
一六　川崎彌六　三七
一七　片野萬右衛門　三九
一八　金森金四郎　四一
一九　加納庄兵衛　四四
二〇　柏淵樅園　四六
二一　横山三川　四七
二二　陸軍步兵中尉館野冬吉　四九
二三　多田順映　五二
二四　竹中重治　五四
二五　竹中萬之右衛門　五七
二六　忠僕爲助　五八
二七　溪操子　六〇
二八　槌谷祐七　六二
二九　陸軍中將塚本勝嘉　六四
三〇　坪井伊助　六七
三一　文學博士南條文雄　六九
三二　工學博士那波光雄　七二
三三　成瀬政右衛門　七四
三四　武藤榮治郎　七五
三五　武藤山治　七七
三六　雲谷任齋　七九

三七 陸軍步兵大尉井深佐太一 八三
三八 野村了祐 八五
三九 野村藤陰 八七
四〇 工學博士野村龍太郎 九〇
四一 大塚榮吉 九二
四二 大橋翠石 九四
四三 海軍少尉黑川永次 九六
四四 矢橋亮吉 九八
四五 梁川星巖 一〇〇
四六 梁川紅蘭 一〇八
四七 孝子柳ケ瀨辨吉 一一一
四八 安田道雄 一一三
四九 理學博士松井直吉 一一五

五〇 松永用助 一一八
五一 工學博士松本莊一郎 一二一
五二 孝子前田萬作 一二三
五三 兒玉良三 一二五
五四 江馬細香 一二七
五五 佐久間種藏 一二九
五六 醫學博士佐藤三吉 一三二
五七 三輪郁三 一三三
五八 宮川小右衛門 一三四
五九 澁谷代衛 一三五
六〇 菱田海鷗 一三九
六一 森島簡齋 一四三
六二 理學博士關谷淸景 一四五

六三　陸軍步兵大佐關谷銘次郎

修身資料 西濃人物誌　第壹輯

西濃聯合教育會 編

一　飯沼慾齋

徳川時代の末に於ける我國植物學の泰斗飯沼慾齋先生名は長順字は龍夫幼名は本平後專吾と改む而して慾齋は隱栖後の號なり本姓は西村氏伊勢國龜山の豪農西村新右衛門の次男にして天明三年六月十日に生る兒たりしとき嬉戲自ら群童に異なり七八歳の頃に乳嫗に從ひ田間に徜徉し從容として之に語りて曰く大丈夫苟も爲す有る者安ぞ寒郷僻地に埋沒して碌々瓦礫と朽死せんや冀くは都門に遊び以て大名を天下に成さんと欲す汝幸に我か爲に歸りて之を父母に告げよと乳嫗深く其言を奇とし具さに之を父母に告ぐ父母笑て省みず先生又更に之を父母に請ふ父母年

幼きを以て許さず其後遂に意を決して單身家を出づ父母謂らく數里にして渡船場あり必ず是より歸らんと人をして見せしめしに渡錢を出し美濃の方向に進めり因て父母は已むを得ず人をして尾行せしむ先生遂に美濃大垣に赴き飯沼長意の家に投じ告ぐるに其意を以てし厚く自ら托す時に年甫めて十一長意是を聞て其志を壯とすれども父母の許を得ざるものは許さずと謂ひければ先生已むを得ず家に歸り父母に請ひ遂に許を得十二歳のとき復大垣に赴き長意の家に投じ懇請して措かず長意其意志に感じ之を同族長顯に議り竟に寄食せしむ長顯は大垣の名醫なり先生志を得たるを喜び是より節を折りて書を讀み專ら文學を講ず比年にして其學大に進む十六歳の時即ち寛政十年偶々博物學大家小野蘭山の幕命を奉じて諸州に採藥するの途次美濃に至る先生大に喜び蘭山に請ひて直に其門に入り之に從て遊學す蘭山其慧敏を愛し誘掖到らざるなし從學すること數年大に本草學を修む蘭山甚だ之を嘉賞し特に擧て入幕の弟子となす其後又贄を水谷豊文の門に執る發明する所頗る多し去りて京師に遊び醫福井丹波守の門に入り其學益々進み業を卒へて大垣に歸り長顯の女と婚し其箕裘を繼ぎ飯沼氏を冒し名を龍夫と改む是に於て醫名俄に遠近に馳せ患者の治を請ふもの絡繹門に滿つ時に其友吉安三榮と云ふ者あり城西垂井驛に居る嘗て贄を蘭醫江馬蘭齋に執り亦其術に精はし先生と友とし善し日夕相往來す一日三榮先生に語りて曰く泰西の醫術夐かに漢家に勝る足下にして苟も之を學はゞ其造詣する所測るべからずと先生之を聽きて大に悟る所あり因て更に蘭法を學ばんと欲し妻子を近親に托し家財を鬻き又諸友と議りて書籍講を結び學資を蓄へて 飃然笈を負ふて東都に出で 津山の藩醫宇田川榛齋（元眞）の門に入る時に年二十八榛齋其篤志に感じ更に其高弟藤井芳亭に就き學ばしむ芳亭の家は下谷に在りて榛齋の家は鍛冶橋に在り兩家相距ること里餘先生日夕其間に往來し未だ嘗て一日も怠らず是に於て修學日淺しと雖學術既に其蘊奥を究め翌年再び國に歸り更に蘭法を唱ふ聲名益々四境に振ひ笈を負ふて來學するもの頗る多く随て病客蝟集復前日の比にあらず然り而して勉學益々篤く未だ嘗て手に卷を放たず常に門人に示すに至誠居其學の語を以てす五十歳の時家を義弟健介に讓り退隱して

欲齋と號し別業を城西長松村に營み平林莊（現今戸田氏寛君の邸及び其東方に約四反許の花園）と稱し屛居客を謝し專ら西說植物學を講究す年已に六十を超ゑて氣力毫も衰へず精研寢食を忘るゝに至る「スウエーデン」の博物學者「リンネ」氏の分類法に隨ひて花を解剖し綱目を檢定し自ら圖を描き遂に草木圖說三十卷を著はし安政三年草部二十卷を刋行す時に七十餘歲なり草木圖說は實に斯學の寶典にして我國斯學の著書中此の書の如く外國學者に賞揚せらるゝこと稀に見る所にして古來我國の植物書中最も完全にして且科學的の者と稱すべく現今と雖學者の常に參考とする所なり後幕府先生の盛名を聞き將さに登用する所あらんとす時に獨逸人「シーホルト」幕命を奉じて江戸に至るを聞きて先生大に喜び與に斯學に關し更に研究せんと欲し幕府の內命を奉ぜんとせしかど家累の爲に其志を果さず爾後靜養自適餘年を送り慶應四年閏五月五日歿す年八十四大垣町緣覺寺に葬る明治四十二年九月十七日　皇太子殿下大垣に行啓の際特旨を以て從四位を贈らる是より先き明治三十二年有志者相謀り碑を大垣公園に建つ戸田伯之に篆し伊藤圭介

文を撰せり

二　伊藤傳右衛門

一身を擧けて治水の事業に任じ不撓不屈の精神を以て之を敢行し竟に能く百年の大計を立て四十餘村の農民をして蘇息安堵せしめしもの是を伊藤傳右衛門其人となす

君本姓西松氏寛保元年某月を以て安八郡大藪町字楡俣に生る幼にして大垣藩士伊藤氏に養はれ其嗣子となる因て其姓を冒す當時藩主戸田氏の封內今村、古宮の二鄉四十餘村の土地極めて卑濕にして惡水常に停滯し南方に揖斐、牧田の兩川を控ゆるも川底高くして之を放流するを得ず稻秧は每歲霖潦の爲に大抵腐敗し數年の中僅に一回の秋穫を見るに過ぎず而して其最低地に至ては村民如何に排水に盡力すとも連年水泡に歸し之を奈何ともする能はず唯天候の適順を祈り萬一を僥倖せしのみ是に於て村民は民力の企及すべからさるを察し其援助を藩主に愁訴して止

ます藩主大に之を患ひ汲々として之が救濟の法を講し且幕府に稟請する所ありき君時に邑官たり其救濟法に於て最も苦心焦慮せり會々幕府は藩主の請を容れ西濃河川修築の擧あり君擢でられて其用係に任ぜられ益々心身を激勵して經營測量し地理に察して水脈を考へ遂に多藝郡横曾根村（今は安八郡に屬す）安八郡墟喰村の堤外字鵜森附近に於て伏越樋四艘及び安八郡今福村に於て伏越樋一艘此延長百七十八間を新設し又鵜森に於て排水路二條此延長四千八百餘間を開鑿し之を牧田川の下流に放出するの設計成る然れども此の設計たる他の郡村に關聯し其利害を異にし且巨萬の工費を要するを以て其實行の困難なる得て言ふべからざるものあり藩主は其實行と監督の任を擧けて君に一任せり君乃ち專心誠意を以て此大任を果さんと欲し殆と寢食を忘れて工事の進行に努力し各部落の里正以下を督勵し天明元年を以て工を起し爾來官民一致協力し幾多の艱難に克ち諸種の障害を排し其辛勞言ふべからず天明三年に至り遂に工事を竣成す其費用實に數萬圓の巨額に達しぬ然れども其後天候不順降雨多量にして揖斐牧田兩川の水嵩激增し爲に惡水は益々停滯し依然

水腐の厄を免れず君が畢生の經營も殆と無効の如く誤解せられ大に紛議を生ず君豫め此事あらんことを知り既に決意する所あり遺書を作りて後事を囑し天明五年五月二十三日自邸に於て屠腹して逝けり時に年四十五後幾ばくもなくして天候回復し水量減退し全く君の豫測に違はず惡水疏通し秋穀大に穰り遺勳始めて顯はれ幾千の農民狂奔抃舞し君の德澤に感激し偏に其寃死を悲傷し追慕の念赤子の慈母を喪ひたるが如し藩主も亦其非命を憐み其功績を嘉し嗣者を召して追賞し且家督を繼かしめたり

明治三十八年木曾、長良、揖斐の三川改修工事竣功し揖斐川の水量頓に減退し惡水の疏通自在となり伏越樋に由らずして直に本川に放出し君の心血を注ぎし大工事は今や不用となれり然れども是れ君の本志の始めて達成したるものにして不用即ち有功の日の到來したるなり是に於て舊鵜森水利組合議員は其功績を永遠に表彰せん爲に全會一致の決議に依り遺績碑を鵜の森に建設し舊本縣知事小崎氏文を撰し舊藩主戸田伯額に篆するに殺身仁民の四字を以てせり

三　今西判左衛門

君は揖斐郡下東野村の人天明四年某月を以て生る名は國豪通稱判左衛門里乙と號す系は本州名族土岐氏より出つ君特質ありて茶儀を好み俳歌を善くす本村の地質乾燥にして古來多く茶を植ゑて田圃の界となす毎歳六月之を採りて沸湯中に投し後之を曝乾して蓄ふ其製法粗略にして飲料となすに足らず君嘗て京攝の間に遊び風土を觀察し歸りて曰く吾郷の土産以て富を致すに足ると乃ち梨樹を栽ゑ椎蕈を養はんとし良種を他郷に求め日夜督促して資斧を惜まず此の如くすること數年失敗を以て中止し人皆之を笑ふ君の意少しも撓まず文政の初茶樹を培養して曰く以て巨利を興し前失を償ふべしと因て宇治に遊び茶戸に就て其製法を問ふに皆秘して傳へず乃ち服を變じて俳歌師となり茶戸上林氏に至り日々僕奴と遊び時に或は酒食を以て其歡心を買ひ略ぼ製法を聞けり五年新に焙爐を造り試に之を製せしに爐製宜しきを失ひ熱氣度に過き其茶盡く赤出し買ふ者なし人亦之を笑ふ君曰く是

れ未だ法を得ざればなりと復服を變して宇治に至りて之を求め始めて焙爐中に鐵棍及び鐵網あるを知り又時々藁を燃やし炭に代へ其火熱を殺ぐを視馳せ歸りて舊爐を壞ち盡く新法を用ふ是に於て製する所始めて良となる君曰く未だし栽培の法良からざるなりと八年其徒西村治良衛といふ者と宇治に至り謝して曰く曩きに假裝して秘法を竊み罪を得ること多し若し其愚を憫み授くるに全法を以てせば國郷其惠に浴せんと茶戸其志に感じ九年春善製者二人を遣はし來る乃ち良種を選び培養を厚くし廬を園中に造りて之に居り躬自ら率先し土を負ひ糞を擔ぎ刻苦して已まず天保元年に至り茶園を六ノ井及び上下萱野に闢き鬱然林を成し栽培採摘の法始めて宇治と等し是れ所謂六井茶なる者なり然れども歲歉屢至り肥料騰貴し得失相償はず家產爲に減ず君曰く是れ時なり吾業豈少しも惰る可けんやと子弟を督勵して益々力を致せり安政六年四月六日病歿す享年七十六歿後數年西濃の茶業盛大となり而して君の田宅殆と盡きたり嗚呼是れ其家產生命を擧けて一國の產業を興したる者に非らずや明治十六年製茶共進會の神戸市に開かれしとき郡民其事を官

に報告したり乃ち金圓を下賜し其功勞を追賞す君の配北島氏子なし女二人あり某子を養ひ二女に配せりと云ふ

四　伊藤東太夫

君は海津郡石津村大字太田の人弘化二年八月を以て生る家世々其地方の郷士たり文久三年亡父の後を襲き年尚少くして里正となり大垣領を管す明治四年岐阜縣の設けらるゝや君更に大里村外數村の戸長に選任せられ專ら意を村治に注ぎ公私の事一つに君の裁斷に待つ特に太田輪中排水路新設及び殖林事業の如きは其顯著なるものなり明治九年伊勢の土匪襲來し宏大なる邸宅並に家財皆烏有に歸す是に於て大に決する所ありて戸長の職を辭し身を實業に委す村民之を惜み留職を懇請して止まざりしも君の決意牢乎として動かず唯其顧問たるを諾したり當時社會の事業未だ起らず園藝の如きは皆無視せられ特に柑橘に至りては獨紀州蜜柑の市場に稱美せらるゝのみにして温州の如きは之を顧みるものなし此時に當り君は世運の進歩に伴ひ果實の需用の增加するを先見し所有の山林五六反を開拓し温州蜜柑を栽培す村民等之を見て君を發狂者として嘲笑し親戚知友は屢忠告せしも斷然屈せず三十年後に於て答へんとて益々熱心に從事し漸く數百株の苗を栽ゑ終り爾來年々其培養の爲に多額の金を費せり明治十六年に至り僅に十六圓餘の利益を得たり是に於て友人は再度の忠告をなせしも君は少しも撓むことなく更に數町の地を開拓し之が培栽に力を致し且前途の有望を確認し親しく關西地方を視察し傍ら苗木を購入し更に大に山林開拓を實行し數十年の久しき一日の如く苦心經營の功空しからず明治二十六年に至り伊藤蜜柑園を完成したり今や每年四千餘圓の收益を見而して數年を出でずして優に七八千圓を收穫せんとする盛況に在り明治十八年及び二十九年の洪水に田圃荒廢收穫皆無にして村民の窮困甚しかりし際唯君の柑園のみ豐作にして曩きに君を嘲笑せし輩は始めて君の烱眼に敬服し君の事業に使役せられ蘇生の思を成せり而して甞て君に忠告せし故舊等も今は反て意を柑園に傾け旣に年々少からさる利益を收め其影響する所隣村は勿論遠く三重縣に及び荒野

山林到る處に柑園を開拓するに至れり是皆君の餘澤の然らしむる所にして大日本農會、博覽會、共進會、品評會等より賞牌及び褒狀を受けしこと屢次なり君は亦子弟敎育の忽にすべからさるを察し嘗て東西に奔走して小學校を設立し自ら學務委員となり以て今日に至る其間敎務に關し盡力督勵せしこと枚擧に遑あらす

五　伊藤又右衛門

世の文明に伴ひ人智日を逐ふて進むと雖至誠の道を踏み行く人は日を逐ふて減し特に近時孝子と呼はるゝ人の世に稀なるは最も慨嘆すべきなり而して爰に伊藤又右衛門君を得たるは豈に大に喜ぶべきに非らずや

君は海津郡石津村字田鶴の人嘉永五年十二月二日を以て生る父を清助と曰ひ七十七歲にして歿し母をつると曰ひ今八十餘歲なり君幼時より孝心甚だ深く敬養兼到り父母の心を安んするを以て務となす故に孝養の傍大に家業を勉め早朝野に出て終日耕耘し夜に入りて歸り深更に至りて寢に就き睡眠すること僅に二三時に過ぎず而して其出入必ず父母の意を承け毎朝家を出つるとき兒今日何れの事に從はんと問ひ其歸るや一日の概況を告げ其笑顏を見るを以て無限の樂となす又外より歸り門に近かんとする際は每に大聲を颺けて歌ひ出だすを例とす人怪みて之を問はゞ君笑て曰く別に理由あるに非らず唯一刻も早く無事を父母に報せん爲めなりと其妻も亦君の感化を受け歸嫁以來三十餘年の久しき未た嘗て父母の意に違ひたることあらず而して君の勤儉力行は能く富殖を致し父の代には一町餘の田圃を所有し村の中產なりしを君の代に至り二町有餘を買收し且貯財も少からず今は村の上流に位せり君四十二歲のとき父を喪ひ哀悼悲傷一家の愁狀暗澹たり是より父の位牌に向ひ毎朝毎夜問告すること其在時と異ならず以て今日に至るまで一日も廢することなし又父病歿後は大に人生の無常を感得し每晨未明に起き菩提寺に參詣し堂前に端坐讀經して歸る是れ亦一日も懈りたることなし此時より前きの高歌を以て念佛に換へ大聲に唱へ歸るを以て誰言ふとなく君を念佛又右衛門と稱するに至れり君今六十歲の身を以て能く八十餘歲の老母に奉侍し附近の寺院は言ふを待た

ず桑名及び高須の別院等にも時々脊に負ふて參拜し又時としては京都の本山に參詣することあり而して其老母に接待すること恰も幼兒に對するが如く懇切丁寧を極め觀る者嘆賞せざるものなしと云ふ

六　陸軍少將今津孝則

君は舊大垣藩士にして弘化二年九月を以て生る幼より身を軍籍に置き文久三年始て壯士組を命せられ藩主に從ひて京都に上り日の御門警衛を勤む元治元年伏見の役に功ありて賞賜を受く尋て山崎警衛を命せられ水戸浪士の上京せんとせしとき防衛の任に當る其他諸種の警備に當れり慶應元年大砲方兼西洋砲術稽古場世話方となり二年軍制の改革ありて大砲伍長に任し大砲教授となる三年藩命を以て大阪に赴き更に砲術を修む後大垣演武所に入り尙砲術を修め遂に其塾頭助となる此歲步兵隊附差圖役に擧けられ尋て砲兵隊附砲車長に進む明治元年の變に君は斥候應接方を命せられ鳥羽街道に奮戰す二年砲術教授方、大砲製彈局改設塾頭助兼勤を

命せらる三年權曹長砲兵係兼火工長等を經て四年砲兵少尉に任じ五年中尉に進む七年東京鎭臺に在りしとき佐賀賊徒征討を命せられ兵を率ゐて肥前の各地に轉戰して功あり尋て熊本鎭臺附となり臺灣征伐の役に參加し又戰功を建つ八年砲兵第六大隊副官、同大隊第一中隊豫備隊長等に補せられ九年六月大尉に進む爾來敎導團、東京鎭臺、士官學校等の諸隊長に歷補せらる十五年勳六等單光旭日章を賜ふ十六年砲兵少佐に任じ山砲兵第三大隊長に補し從六位に敍せらる十八年近衛砲兵第一大隊長、學術檢查委員となり二十二年勳五等瑞寶章を賜ふ此歲砲兵中佐に陞り野戰砲兵第一聯隊長に補せらる二十六年砲兵大佐に進み從五位に陞敍せらる二十七八年の役第一師團に屬し野戰砲兵第一聯隊を率ゐて渡淸し金州城及び旅順口攻擊に參加し赫々たる武功を奏す又二十八年蓋平、破臺子及び太平山の激戰に於て敵兵を擊攘し尋て東七里溝、柳樹屯を經て田庄臺に向ひ野砲三十六門を率ゐ大に砲火の威力を逞ふし敵軍を粉碎し戰功益著はる此歲陣中に於て勳四等瑞寶章を賜ふ凱旋後功四級に敍し金鵄勳章及び旭日小綬章を賜ふ三十二年九月陸軍少將に

陞任し年齡滿限に依り後備役に入り正五位に叙せらる君は志を軍人に立て終始渝らす且國家の爲め幾たびも萬死の境に出入し赫々たる勳功を著はし勇退餘生を送る是れ男子の願ふ所にして確乎たる精神を有するものに非らされは希ふべからさる所なり

七　原田種德

君は海津郡高須町の士族にして嘉永三年十二月を以て生る人と爲り溫厚醇篤にして夙に學問に志し造詣深かりしを以て明治二年三月高須藩黌日新堂の訓導に擧けられ身研鑽を積むの傍ら育英の任に當れり幾ばくもなくして藩は名古屋に合併せられ一旦廢校となりしも尋て學制頒布せられ明治六年日新學校の創立するや直に登用せられ爾來今日に至るまで三十六年の間學制の改革、組織の異動の爲め數次の變遷を經たりしも終始渝ることなく學校の柱梁を以て自任し鋭意力を盡くして校運の發展を圖り他校より招聘せらるゝこともあるも曾て應せず唯改善進歩の實を擧くるを以て務となし孜々として之れ勉め時有りて寢食を忘るゝに至る其誠實の志遂に隱然民心を動かし施設の實績漸く成り高須學校の今日有るを致す蓋し其因由する所遠しと謂ふべし君は其職に忠實なるのみならず學問修養の功を積むこと久しく夙に國語及び漢文に通じ兼て數理に精し明治八年師範學科を卒へ爾來時勢の推移と學說の進歩に伴ひ之が研究に力め敢て人後に落ちず故に講習會、研究會等の開設せらるゝや必らず出席聽問し嘗て看過したることなし君の修養學殖己に此の如くなるも曾て矜伐せす恭默にして敢て人と論議せず時に唯微言を以て諷規することあるのみ故に自ら世の尊敬を增し推服を深くす其生徒に對するや用意の周密にして指導の懇切なる常人の企及する能はさる所而して之を率ゐるに躬行を以てし之を諭すに實踐を以てす是を以て兒童より青年子弟に至るまで君を敬慕すること慈母の如く怡々として敎を受け訓練の績期せずして自ら擧かり和氣靄々の裏に智德を進むるの妙用は蓋し學んで到る能はさる所なり明治二十一年一月門生等相謀り莊嚴なる頌德式を擧け銀盃一組を贈りたり是れより先き明治十六年文部

省より教育上勤勞尠からさる故を以て玉篇並に硯筥を賞賜せられ而して明治三十四年には本縣知事より多年教育に從事し功勞顯著なる故を以て金圓を賞與し又四十二年二月には文部省より其學德を表彰し金百五拾圓を賞賜せられたるが如き亦以て君の德望感化の偉大なるを知るに足る

八　戸田大榮院

戸田大榮院は名を雅子と稱し舊淀藩主稻葉正守の五女なり十六歲にして大垣藩主戸田氏彬公に嫁せしも琴瑟僅に十年にして公の薨去せらるゝに遭ひ今の伯爵氏共公を養ひて世嗣となし爾來大榮院と稱し藩邸に棲居し諷詠自適閑生涯を送り明治四十一年四月十七日七十一歲にして逝去せられ更に大榮院殿鏡譽明月貞仁大姉と諡せらる

大姉天資聰明氣象雄雅夙に文武を兼修し太刀薙刀の習練より兼ねて馬術に長じ又書を能くし和歌に巧み琴絃花鳥の技に至るまで研鑽通曉皆優に堂奧に上れり特に押繪刺繡に長じ精巧鮮緻人をして讃嘆せしむ往年米國大統領及び其女の本邦に來遊し大垣驛を通過するや其製品を寄贈して非常の稱贊を博せり明治維新の際氏共伯年猶少にして氏彬公既に世に在らす藩論鼎沸の間能く名分去就を過らす終始官軍の先鋒として勇名を博したるもの固より良臣の輔弼に因ると雖亦大姉の措置宜しきを得しに基つかすんばあらす

大姉又記臆に長じ凡文武の道より家事作法の技に至るまで一旦修得せしことは毫も遺忘することなし藩士家扶等疑義ある毎に大姉に問へは即坐に明答せられ曾て遲滯あることなし强記博覽眞に人をして驚嘆に堪へさらしむ身華胄に生れ近侍の左右に從ふに拘らす寸時も袖手傍觀するを厭ひ必す何事かに手を下すを常とす其萬事に通じ敢て遺忘することなきもの皆此主義性質より胚胎し來れるなり

大姉又武士的教育の薫陶を受け身を持すること謹嚴に心を操ること淸廉に二十六歲にして所天を喪ひ爾來四十餘年間嚴格なる家風を維持し貞操節烈禮儀を尊び廉恥を重んじ主客上下の分を確守し身病蓐に在る時も端坐せされは敢て藥を服せず

人に面せず加ふるに勤儉質素に安んじ痛く輕佻浮華を戒め身を以て範を示す蓋全國舊藩地の跡を見るに先つ主從敬愛の美風を亡ひ遂に放縱奢侈俗を成すもの比々たるに反し大垣藩が往時の良習を維持して能く主從の情誼を繼承し質實醇厚の氣を失はす比較的多數の人材を今日に出し得たる所以のもの蓋大姉の提撕に負ふ所尠少ならさるものあり

殊に大姉は深く心を敎育に注き今の高等女學校興文小學校等へは式日祭日每に臨場せられ裁縫作法の女子に必要なる所以を說き金品を寄贈して生徒を奬勵するを常とせり大姉の逝去せらるゝや氏共伯は遺產の內一千圓を支出し奬學資金として各學校に寄贈せられしは故大姉の志を成せしものにして大姉の如きは眞に婦人の典型と謂ふべし

九　戸倉竹圃

君本姓水谷氏通稱六郎竹圃は其號なり兄弟十二人君其末子なり君は家道裕かならざりしと兄弟多かりしとに因り九歲のとき名古屋に出で或は表具屋の弟子となり或は醫家の書生となり備さに辛酸を甞む然れとも學問の志厚く晝は專ら主家の務に從ひ夜に入り少暇を得て漢籍を硏習す斯くの如きこと十年志操益堅し當時養老郡大跡村戸倉耕月庵の長女旣に婚期に達し養子を求むるに際し或人君を推薦せしに耕月庵は貧富衡を失へるに關せず其氣骨と耐忍とを愛し之を迎えて女婿となす時に年十九君未だ白面の一書生に過きざるも養父の信任厚く直に家事を擧けて一任し齡四十一二を以て隱居し心を俳歌に專らにし身を風月に寄せ遂に芭蕉翁十四世の宗匠となり俳名世に著はる君は家を齊ふるの傍ら養父の膝下に奉侍し且俳歌の敎を受け其奥を佐ケ每夜十二時に致らされは寢に就くを得ず而して君の着眼は俳道に非らずして詩文なり然れども養父の好める道に非らさるを以て敢て之を口にせす深更家人の眠り去るを待ちて竊かに起き出て書室に入り靜かに點燈し默讀硏究し適々左傳を讀まんと欲するも書なし君時に金の出納を司とり之を買ふこと自由なれども養父の意に副はさるものを買ふを屑よしとせず實父に請ふて之を購

求し暇あらは熟讀玩味し造詣最も深し養父五十四五歳の頃脚疾を得横臥すること九年君能く之に事へ少しも違ふことなかりき養父歿後僅に閑散の身となりしも元來虛弱なりしを以て終年殆ど門を出でず粗衣粗食に安んじ唯遠來の客に接するを以て樂となすのみ齡五十にして病歿す君詩文を善くし兼ねて書道に巧なり其書頗る山陽に似たるを以て狡徒時々來りて揮毫を求め且山陽の名を署せんことを乞へとも君其不德を責め斷然拒絕せり森春濤、大槻磐溪等の如き皆君の知友にして屢其來遊を勸めしも多病の故を以て遂に果さず著はす所養老山房詩鈔二卷あり野村藤陰翁之れが跋を爲る其略に曰く竹圃山人天資善病屛居門を出つること稀なり性甚だ詩を好み起居飲食、勝景樂事皆詩に於て之を發せざるなし其詩清秀雅淡絕えて塵俗の氣なし蓋山人は養老山下に住み目名山に飽き耳を靈瀑に洗ひ復人間榮辱の事を知らず宜べなり其詩の王孟韋柳の域に出入するやと

一〇　所郁太郎

君本姓矢橋氏不破郡赤坂の人父を亦一と曰ひ世に釀造を以て業となす年甫めて十二出でゝ揖斐郡西方村の醫師所伊織の養子となる因て所氏を冒す養父之を加納藩醫青木松軒に托す君慷慨にして氣節あり常に尊王の大義を持す年十八にして京師に遊學し贄を安藤桂洲に執り尋て大阪の大醫緒方洪庵の門に入る後復京師に之き醫を以て業となし博く憂國の志士と交る其家長州藩の側に在りしを以て邸士病有るときは必ず來りて治を請ふ是を以て能く其藩情を悉くせり文久三年將軍家茂入朝し勅を奉して攘夷の期を五月十日と定め之を諸藩に傳ふ君之を聽き蹶起力を提げて長州藩邸に至り力を國事に致さんことを請ふ既にして攘夷の期に及び長藩は外艦を馬關に砲擊し幕府の詰責を蒙る君乃ち志士の間に奔走盡力する所ありき此歲八月十八日廟議一變して長藩の禁闕警衛を免し且藩士の入京を禁し三條公以下七卿の官位を削る長藩の老臣等七卿を擁して長藩に赴く君亦其中に在り是より先き長藩の罪を獲るや薩藩之を機とし專ら毛利氏を排擠す來島某之を憤り薩侯の二條城を出つるを窺ひ之を狙擊せんとす長藩の邸監深く之を憂ひ以爲らく是れ更に

一敵を設くるものなりと因て君をして來島に説かしめ纔かに之を止むることを得たり既にして福原、國司、益田等の諸氏長兵を率ゐて東上し京師に屯す君亦窃に東上し國司氏の隊に投し大に蛤御門に戰ふ後福原、國司、益田等の刑せらるゝに及び長藩の俗論黨の勢威大に張る君乃ち高杉晉作等と遊擊、奇兵二隊を合し黨人の國を誤る者を討伐し藩論茲に一に歸しぬ慶應元年二月疫に罹り周防國吉敷郡の軍營に歿す享年二十九門人長屋丁輔遺髮を齎らし還り不破郡赤坂町妙法寺に葬る

君風采温雅然れとも其人に接するや苟も合はず又與に談ずるに足らざる者とは言を交へず唯事苟も國家に關すれは侃々極論し其説を終らざれば已まず彼の傲驕なる高杉晉作の如きも君能く道を以て之を左右し晉作も亦常に己を屈して之に服せりと云ふ明治三十一年其遺功を追賞し從四位を贈らる聞く維新の際長藩の俗論黨今の井上侯爵を殺さんと欲し暗夜侯を湯田といへる所の墓畔に擁して之を亂刺し迸血淋漓氣息殆と絶つ君之を聞きて現場に馳せ疊針を以て創口を縫合し纔かに應急療法を施し以て侯の一命を救ひたり侯爵は此再生の恩に酬いん爲に君の姪某を家に養ひ其成業を期すと云ふ

二一 小原鐵心

君名は忠寛字は栗卿通稱二兵衛鐵心は其號なり晩年に是水醉逸と號す父を忠行と曰ひ母は上田氏大垣藩主に仕へ食祿七百五十石藩の名族たり君天保十三年を以て職祿を襲き兼て會計の事を管す時に年三十六居ること二年藩主學政を振興せんと欲し特に君をして其事を擔任せしむ弘化三年夏六月夷船入港の事あり藩主乃ち君に命じ豫め邊備の法を講ぜしむ君因て一篇の著書及び隊伍の圖を作りて獻ず四年某月戶田伊豆守浦賀奉行に轉任し警備の事に當る君適任の人を得たるを喜び詩を賦して其行を壯にせり嘉永七年米國の使節彼理浦賀港に來りしとき君藩命を受け士卒を率ゐ往て戶田伊豆守を援け變に備ふ是より先き國用多端饑饉荐に臻り上下窮困す藩主之を患ひ非常の大計を建て濟民の要法を定めんと欲し君をして專ら其任に當らしむ君此際先つ家藏の點茶具を典し以て鰥寡を賑恤せり且大に畫策する所

あり藩主に獻議し稅法を改め冗費を省き以て財政を釐革す數年ならずして倉廩充實し民凍餒を免れたり安政二年三百五十石を加賜し其功を賞せらる君固辭すれども聽されず君乃ち每歲其二百五十石を納めて公費に充つ文久二年春病を以て辭職を請ひ夏五月に至て漸く許され直ちに旅裝を理し加越京攝の間に優遊し大に心身を養ひ且天下の諸名士と訂交せり特に此行に於て松平春嶽公及び三條實愛公に內謁し他日輔藩勤王の地をなせしもの少からず同年冬職に復す三年秋藩主に從ひ京都を護る元治元年七月長州藩士福原越後等の闕を犯すや君膽略を以て急擊し僅かに二時間にして之を退く是冬武田耕雲齋等兵を率ゐ京に上らんとす藩主幕命を以て歸藩し君亦從ひ歸り警むる所あり文久慶應の際國家益々多事となり人民の窮困亦甚し君復策を獻し兵食を調へ武備を嚴にす慶應二年春三月野村藤陰、菱田海鷗、菅竹洲を從へ江戶に祗役し六月藩主に扈して大垣に歸る此時亦奇錄の著あり三年藩主再び功を賞し百石を加賜せしに君復固辭して受けず藩主其篤志を嘉し遂に之を聽るす

明治元年大政復古するや博く人材を徵し國事に參せしむ所謂徵士なり君選ばれて京に入り王事に鞅掌し尋て參與に任ぜらる時に正月三日なり會々伏見の事起り大垣の藩兵德川內府の先驅をなす而して君の子忠迪其中に在り君之を聞き大に驚き即時使を馳せ忠迪に諭さしめて曰く內府今日の擧蓋し羣小の爲に誤られたるのみ汝何ぞ死を以て直諫し內府をして單騎闕に詣り罪を謝せしめざると既にして事終に及ばさりき君又藩主の順逆を誤らんことを恐れ朝廷に請ひて大垣に馳せ歸り說くに大義を以てし藩主をして上京罪を待たしむ是に於て朝廷藩主に命し東山道の先鋒と爲り功を建て自ら贖はしむ當時諸藩向背を誤る者少しとせず而して大垣藩の翻然反正して王事に勤めしもの君の力最も巨多なりとす是月十七日會計官判事を兼任し從五位下に敍せらる五月十二日江戶府判事を兼任す會々病みて途に上る能はず其職位を解かんことを請ひて允されず固く請ひて允されたり乃ち特に鎧一具を賜ひ副ふるに褒詞を以てし在職中の功を賞す明年夏朝廷藩兵の屢戰功を奏せしを以て賞祿三萬石を藩主に賜ふ藩主乃ち千五十石を頒ちて君に賜ひ其輔弼の功

に酬ひぬ既にして諸藩版籍を奉還するや朝廷更に舊藩主を以て本藩知事と爲す君乃ち大垣藩大參事に任せらる君此際金千圓を獻し藩內開墾費に充つ四年正月本保縣權知事に轉任し未だ任に赴かずして免せられ大垣藩出仕に補せらる五年四月十五日病に罹りて卒す享年五十六城南全昌寺に葬る君三女あり姪を養ふて嗣となし長女に配す即忠迪なり

君人と爲り磊々落々活眼達觀す菱田海鷗は君を秋天碧海の大月に喩え鴻雪瓜は君を以て茫々たる宇宙間唯一の知己となす此兩氏は平素君と水魚の親あり故に君を知る者兩氏に若くものなし一片の月旦亦以て君の人格風采の偉大なるを知るに足る君夙に文學を好み贄を齋藤拙堂に執り能く經濟に通ず且詩文を善くし傍ら書畫を作る平生交遊頗る多く梁川星巖、佐久間象山、藤森弘庵、高島秋帆、大槻磐溪、鷲津毅堂、小野湖山等知名の士屈指するに勝へず性又酒を嗜み量最も大嘗て一日宴に侍し上親しく大盃を賜ふ君乃ち滿引數盃を盡くす此を以て飲名益々高し常に梅花を愛し老梅數百株を城北の別墅に移植し亭樹を花間に築き以て逍遙偃息の處となし暇あらば則ち客を會し詩を賦し文を論し豪飲以て樂む然れども未だ嘗て宿醉を以て事を廢せしことあらず藩主三世に歷仕し屢國家の多難に遭遇し蹇々盡力し一藩の柱石となり士民の信賴を受く明治二十年一月　皇上西幸の際特に正五位を贈られ明治三十三年五月朝廷其遺勳を褒し子適を華冑に列し特に男爵を授けられたり

家藏點茶具。碌碌同敗瓦。典之代黃金。要以救鰥寡。只是先人物。掩淚訴泉下。

天賜一雙金踏鐙。恩光長照子孫榮。用之兵馬非吾事。緩轡尋花答太平。

問我梅花妙。玄玄不可言。百端公事了。孤坐月黃昏。

商權在手尙幾先。巨利漁來城可連。千古迂夫靑砥子。百方搜得十文錢。

二　岡田將監

君は尾州星崎城主岡田重善の次男にして初め豊臣秀吉に仕へ征韓の役君命を奉じ

て渡航せしこと七回能く使命を果せり後徳川家康に屬し關原及び各地の戰に參加す同七年濃州郡代となりて笠松に在り大阪の役兵器奉行となりて從軍し元和偃武の後駐在所を郡村に設け州内各郡を巡檢し境域を匡し貢租を正し孜々精勵すること前後三十年の久きに及び治績大に擧り幕府の嘉賞を受く特に治水事業に至ては夙夜焦心苦慮せし所にして堤防堰埭の設計は最も精究細慮を費せり彼の木曾揖斐長良の三大川及び他諸川の堤防は多く君の設計に依りて築造せし所なり就中揖斐川に於ける尻無堤及び衣斐井水の如きは其遺績の著明なるものにして尻無堤の設計は荷國土木技師の稱讃せし所と云ふ寛永六年伊勢内宮造營の際遷宮式を奉行し始めて宇治橋架設を企て竣功せしめたり其功を以て笠松より揖斐城に移り旗本となり爾來地方の爲め畫策施設する所多し揖斐町民之を德とし岡田氏二世豐前守善政及び第八世善明の三靈を合祀し三輪區北新町に神殿を建立し三靈社と稱し今に至るまで之を尊崇追慕せり

一三　法學博士　岡田朝太郎

朝に出てゝ燕京大學堂の講座に滔々懸河の辯を揮ひ夕に退いて閑寂なる衚衕兒裏に老帝國刑典の研鑽に餘念なしと稱せらるゝ法學博士岡田朝太郎君は實に我が帝國刑法學界の白眉にして我か大垣町の出身なり一樹高花明遠村といへる如く君に依りて大垣の名聲を高めしこと幾許なるを知らすと雖高樹の下却て暗ふして之を知るもの少きは遺憾とする所なり

君の祖父多七は其妻まつと共に大垣船町に住み鎖々たる魚商を營みしに不幸病に罹り一女さく子を遺して早世せり此のさく子は即君を生める母堂なり君の父は平八と稱し表佐村の農家に生れ丁年の頃岡田家の養子となり戶田公の御供廻を勤めしか元來劍道に巧なりしを以て擢てられて士班に列し兼用隊長に補せられぬ維新の後大垣監獄の看守となり明治十五年より岐阜監獄に轉任せり薄給の身固より裕に妻子を養ふへくもあらねは母堂は魚商を繼續し昆布卷等を街頭に鬻きたりと云

ふ斯る間に養育せられし君か幼年時代の艱苦は言ふに忍びさるものありき君の幼時は頗る腕白にして夏の水泳冬の雪達摩君常に大將となりて群兒を督勵し時に弱者を窘めて號叫せしめしこと多かりきとぞ十二歳の頃君一日學校に在りて師命に背き過激なる叱責を蒙りければ通學の念全く絕ゑ父母如何に訓戒すとも遂に肯せす乃茶椀の繪書きを學はんとて山本善助に就きしも斯る末技は到底身を立て名を遂ぐべき業に非らずと思ひ實姉まさ子が東京なる金子某に嫁せるを賴とし十五歳の時決然郷關を出てぬまさ子の志や厚かりしと雖實費の給與を厚ふする程の家庭ならさりければ君の苦學は眞に慘憺たるものにして紈袴子弟を愧死せしむるに餘ありき君か紅葉露伴等と交を結びしは此寒陋書生の時代にして素より文學上の嗜好ありしに因るとはいへ麵麭の爲に毫を染め文を賣りしといふも過言にあらさるべし斯る辛酸の間に佛語を外國語學校に學び尋て大學豫備門を通過し法科大學に入り明治二十四年七月を以て卒業し進て大學院に入り刑法學を研究せり天稟の才に加ふるに嗜好の學術を研修せしを以て忽ち斯學界に一頭地を拔きければ擢てられて法科大學講師となり且二三の私立學校に於て法律講座を擔任す君の頭腦明晰にして議論も亦透徹し秋毫の凝滯なく如何に複雜せる原理を講するも快刀亂麻を斷つ槪ありしかは學生間に於ける好評嘖々たりき明治二十九年文部省留學生として佛獨兩國に遊び刑法を專攻すること三年此の間自己の蘊蓄せる學說を公にして歐洲斯界の泰斗を驚かしゝことも屢次なりきと云ふ歸朝後暫く京都大學の講座を擔任し更に東京大學に轉し學生の益欽仰崇拜する所となりしか一朝淸國政府の招聘に應して今や北京大學の講座に登れり是より先法學博士の學位を授けらる

君夙に我か國刑法の不備を慨し之が改革を熱望せり嘗て政府か刑法改正案を草して之を第十五議會に提出するや民間の反對意外に激しく駁論囂々として起り該案の運命風前の燈に似たり君之を見て慨嘆措く能はす自ら反對論の渦中に投し極力改正案の防禦に盡す不幸にして議會の贊成を得る能はさりしも君か刑法學者としての名聲は之か爲に一段の光彩を加ふるに至れりと云ふ著書として刑法總論、刑法各論、刑法講義等あり何れも斯界の珍重する所たり

君の父平八氏は明治二十一年三月八日を以て病歿せり時に君尚東京在學中にして此の凶報に接し倉皇歸郷して葬儀を了したるも未た遺れる親を養ふを得ずされは嘗て同家に小僧を勤め居りし田中辰二郎に造り平身叩頭して大學卒業まて祖母と母とを養はれたしと懇請したる君か腸や如何に九回したるへき君成業の後恩人辰二郎に數百金を贈り且其子女の小學科を終らは必す自邸にて教養すへきを約せり君の美德の及ふ所何ぞ唯此事のみならんや今只其一例を擧けたるのみ

一四　脇坂文助

君は安八郡名森村字大野の人天保十三年六月を以て生る幼にして父を喪ひ叔父の手に因て鞠育せられたり人となり頴敏多才家素と巨萬の富を有せしに非らすと雖夙に志を公益に存し水道の開鑿より道路の修繕等に至るまて專ら衆庶の利を圖り且力を奬學の事に致せり今其事業の一二を擧くれは森部輪中の排水及ひ木曾川の河身改修の最必要なるを察し多年奔走盡力する所ありしも遂に其成功を見るを得さりしは惜むへし獨君の事業の中に於て水利上の功績尤も顯著にして村民永遠のを亨幸福くるは同村懸廻堤防是なりし該地は本と茫漠たる荒野なりしに君は率先之か開拓を實行し且之か堤防を築造せんと欲し時の地主に謀りしも皆工費の巨額にして得失の償はさらんを恐れ其議を容れす君乃工費の全部を負擔し竣功後の効果に因て之を徴收せんことを約し文久三年十月之を官に請ひ同十二月を以て起工したるも諸事意の如くならす隣接諸輪中より水利上の抗議百出し物情騷然動もすれは不穩の擧に出てんとせしも君斷乎として屈せす百方調和を試み苦心經營以て工事を督勵せしこと十年一日の如く明治初年に至り遂に能く素志を貫徹し耕地六十五町餘を開拓し爾後其收益を見るに及ひ漸次關係地主に交附し其工費を課したりしも大半自己の損失に歸し爲に晩年家產を傾くるに至れりと云ふ君明治初年より戶長、堤防委員、學區取締、縣會議員、縣會議長等の公職を奉し盡瘁する所あり明治二十五年八月を以て歿せり

一五　陸軍少將　可兒春琳

少將は大垣藩士にして幼より身を軍務に委ねんと欲し專ら兵學を研究し他日に期する所ありき十七歲のとき伏見の役に初陣の功を立て尋て會津の戰に參加し廢藩置縣の際東京鎭臺に職を奉し後廣島、大阪の各鎭臺に轉任し日淸の役大隊長として出征し戰功に依り勳四等に叙し旭日章を賜ふ明治二十九年聯隊長に補せられ後大佐に昇進す日露の役起るや決然征途に上り第一軍に屬し奮擊突進各地に轉戰すること二十五回の多きに及ひ威武大に揚り向ふ所風靡す就中沙河會戰の際蓮花山の夜襲に任し猛烈果敢なる攻擊を行ひ一擧にして之を占領したり又奉天會戰の時紅土嶺の嶮要に據り頑强に抵抗せし敵に對し白晝突擊を實行して遂に其堡壘を奪取し尚進んて高頭嶺の攻擊を續行し旣に現員の三分の二を失ふも敢て屈せす遂に敵陣を攻略したり之が爲に第一軍司令官より前後二回の感狀を受け大に武勳を顯はせり而して此二十五回の戰鬪中徐家溝附近に於て敵彈飛來し鼻部を貫通し右頰を擦過し爲に重傷を負ひ四方台病院に入り約一ケ月にして全治復隊し益健鬪奮戰し以て平和克復のときに及へり功を以て出征中已に少將に進み旅團長に補せられ凱旋の後勳三等功三級に叙せられ金鵄勳章及ひ旭日中綬章を賜ふ少將人と爲り沈毅勇敢にして常に精神敎育を重んじ軍人の特色を發揮するを以て任とす宜へなり此の未曾有の大戰に參加し赫々たる武勳を建てしは

一六　川崎彌六

君は不破郡關原村の人にして嘉永四年十一月二十日を以て生る父を彥兵衛と曰ひ母を宇良と曰ふ君資性廉直篤實にして力を公共の事に盡し明治十六年戶長に擧けられ町村制實施の際更に村長となり克く地方制度の主旨を體認し專ら自治の發達を圖り遂に本村の振興を遂行せり

關ケ原の地たる昔時中山道の要衝にして旅客の往來繁く貨物の出入盛なりき故に居民は眼前の利を收むるに慣れて農を務めす隨て得れは隨て散し相率ゐて奢侈に

流れ勤儉貯蓄の念に乏しく維新以後時勢一變し復前日の觀なく中産以下の徒は多く活路を失ひ村內漸く疲弊し殊に鐵道敷設以來一層衰境に陷り破産者踵を接す故に教育振はす勸業擧らす道路溝渠破壞に委し貧民年を逐ふて增加し遂に貧弱難治の村と化しぬ

君の職を奉するや鋭意村務の整理に努め以爲らく弊風を矯正し衰勢を挽回するは勤儉の風を養ひ農事を勵ますに如かすと明治十八年大に村民を會し一村財政の出入統計を示して諄々之を戒飭し因て規約二十五條を締結し自ら其監督に當り守る者は之を褒し違ふ者は之を戒め勸誘奬勵すること五年一日の如く村民遂に勤儉の風を尙ぶに至る今其事業を略擧せんに十九年に同村字池寺の溜池荒廢して養水足らさりしを以て主として貧民を使役して修築の工事を起し二十二年に至り竣功したり爲に從來の田地の外十五町餘の新田に灌漑し養水猶餘あり因て養水使用法を設け得る所の料金拾五圓餘に及べり二十一年に同村字六反田虎杖野の荒野開拓に着手し且灌漑水路の開鑿の工を起すに當り亦村內の貧民を使役して艱苦經營し遂に貧民救濟と村有財産增殖の目的を達し爲に得る所の田地二町二段餘に達せり又共有山林の取締法を定めて濫伐を禁し之を戶數に割當して其使用料を徵し其保護を嚴密にせり二十三年には稻作比較試驗準則を設けて農事を奬勵し又普通教育の發達を圖り就學生徒漸次增加し遂に校舍を改築するに至れり

君の計畫に依り村有財産年々增殖し現に年額四百圓餘の收入あり數年を出てすして村費の全部を支へんとする際野上、松尾、山中、藤下諸村と合併し今の關原村となり猶村長の職を繼續し明治三十四年六月に至て辭任し今は岐阜縣物産館に奉職し縣下勸業の爲に努力せり之を要するに君は就職以來精勵勤勞以て實績を擧け貧村を轉して漸く富有の村と伍するを得るに至らしめたり因て二十七年九月を以て藍綬章を賜り其善行を表彰せられたり

一七　片野萬右衛門

君は安八郡大藪町字四鄉の人通稱萬右衛門南陽と號す家世々豪農にして名遠近に

間は君人と爲り堅忍にして才幹あり少くして學を村瀨藤城に受け書畫文墨を嗜む然れとも治水を以て己の任となす天保年間擧けられて里正と爲り數村を兼攝し職に在ること三十餘年或は堤防を修め或は溝渠を鑿ち或は灌漑に利し以て公共に資する所あらんと欲す世尙封建時代にして上下懸隔し其志を展ふるを得ず明治中興の際初めて笠松縣を置かれ小崎利準氏來て判事と爲り君の人と爲りを知り其事業を助けて工事を起さしむ君其知已の恩に感し力を竭くして計畫し遂に素志を達するを得たり特に其功績の偉なるものは大榑川口に於ける洗堰の大工事なり其他處々の堤を修築し防水害を免れしこと許多なりとす君又三大河改修を實行し縣下に於ける大水害を除かんと欲し同志を募り治水共同社を結ひ之か經營に從事し着々步を進めしも中途病を得て終に起たす享年七十五歳にして沒せり然れとも君の遺志遂に空からす今日三大河改修の大土功は完成し萬民其利澤に蘇息せり

君小崎氏と相識れるは其判官たりし時にして後知事となるに及ひ公私の往來益滋く常に胸襟を開きて志を談し事を諮り互に相敬重せり明治十七年諸村の戶長を改選するに當り知事君に諭して其職に就かしめんとす君時に年七十四固辭して就かす知事乃ち曰く戶長は久しく世人の賤める所今吾君を借りて之を重からしめんと欲するなりと君乃ち命を受く是に於て一縣の故老皆戶長となり戶長是より重せられしと云ふ鄕人其德を慕ひ碑石を大榑川口の堤上に建て之を不朽に傳ふ

一八　金森金四郎

君字は恬敏澹庵と號す大垣の人にして世々商を以て業となす人と爲り豪邁果斷最も理財の道に長す然れとも家道衰頽の後を承け負債山の如く復如何ともする能はす偶賴山陽の通議論利策を讀み大に感する所あり父に謀りて家什器物を悉く鬻き以て一面負債を償還し一面商業の資に充て刻苦精勵勤儉自ら守り拮据數十年富巨萬を累ね家道復大に振ふ晚年人の退隱を勸むる者あり答て曰く予か香火院松濤寺に一大老樅あり其幹數十尋高さ天主閣を淩く然れとも年毎に枝葉繁茂し未だ一日も休止せす草木猶然り人にして豈退隱するを得んや死に至るまて止まさるは吾人

の天職なりとて益勉めたりと云ふ

安政五年幕府横濱を開港し米魯英佛蘭の五ケ國と貿易するを許すや君視察の爲め同地に赴き富國の基は外國貿易に在りとし而して茶業の前途極めて有望なるを信し同地北仲通二丁目に金森茶問屋を開き兒三四郎をして之を幹せしめ本店を大垣に置き濃産の茶を輸出し又近傍の諸郡に茶の栽培を奬勵し製茶の改良を促しけれは濃茶の名始めて市場に嘖々たるに至れり當時鎖國攘夷の論尙囂しく時に浪士に襲はれ危險屢其身に迫りしかとも君少しも意とせす益事業を擴張し一ケ年の賣上金額數拾萬圓に達し三井物産組融智商社と比肩するに至れり其後蠶絲業の國家將來の一大富源たるを看破し斯業の開發を促さんと欲し明治八年遂に横濱支店を閉鎖し製茶輸出の業は漸次縮少の方針を執り之に代ふるに製絲業を以てせんと欲せり而かも自ら謂らく物に本末あり製絲をなさんと欲せは先つ養蠶栽桑をなさゝるへからすと是に於て明治十二年信州江州地方より多く桑苗を購入し己か所有せる十餘町の田園に植ゑつけたり當時小作人等未だ蠶桑の利を知らす唯自家の小作地

を沒せらるゝを恨み桑苗を拔きて障礙を加へたりしも氏は益之か栽培をなせり同十六年養蠶所を開き敎師を聘し以て範を世に示し又研究會を設け蠶業を開發誘導し且蠶種の製造をなせり是より地方人民漸く迷夢を醒し今や面目一新し一大蠶業地となれり同二十年坐繰器械を据ゑつけ試驗的製絲をなし同二十四年始めて機械製絲をなす乃ち大に其改良を圖り名聲漸く高し年七十にして海外機業視察の志あり未た果さすして歿す

君は西濃の大患たる治水の爲に最も力を致し彼の明治二十一年大垣輪中の大水害に際し乙澪決水の事を時の知事に建策し輪中八千の民家四萬の蒼生を水中に救ひたることは地方人民の猶記憶に新なる所なり又道路の修繕橋梁の架設等に貲を捐てしこと少からす殊に敎育に就ては最も意を致したり明治二十年に大垣町有志者英語學校を創立し其維持に困むや君奮て其後を承け其兒吉次郎をして之を幹せしり費を補ひて維持したり同二十四年の大震災に際し不幸にして校舍倒れ休校しためしも前後五ケ年間に業を受けしもの凡そ八百人に及ひき君又慈善の心篤く常に

鰥寡孤獨の者を憫み貧民を救へり明治十五年西濃に大水害ありて田園荒廢し生民塗炭に苦しめるとき君は多くの金穀を散して之を賑恤せり同十八年經濟界の恐慌に際し地方人民又大に困弊す君乃ち焚出をなし貧民に粥を施せしこと一百日施を受けしもの凡壹萬人なりき君又神社佛閣の興廢は國體風致に關するとなし其新築修繕等に寄進せしこと枚擧に遑あらす香火院松濤寺に一切經藏を寄進せしか如きは其一例なり

一九　加納庄兵衛

君は揖斐郡川合村字五之里の人天保六年一月二十八日を以て生る父を源八郎と曰ひ維新の際代官を勤めたり君資性剛直自ら奉すること儉素なり常に冗費を省き以て公共に資せんことを期し且產業を奬勵し投機心を戒む曰く家產を增殖せんより之を失はさらんことに努むへしと當時人智未た開けす養蠶の如きは人皆之を厭へり君之を患ひ自ら率先して試育し大に勸誘する所ありしを以て今や養蠶業盛大となり年額數萬圓を利し郡內に冠たり其他或は地方の水利を圖り或は基本財產積立の方法を立て或は弊害多き慣例を廢する等公共の福利を進めしこと少からす

君明治の初年權區長に擧けられ縣制實施のとき縣會議員に選任せられ同十七年官選戶長となり三輪村に通勤し同十八年六月加納村外九ケ村聯合戶長に轉し廿三年同村組合長に任せられ廿五年三月を以て辭職せり君職を掌ること眞摯事を圖ること親切にして人其先見の明に服す故に治績大に擧り郡內其比を見ること罕なり君晚年最も力を教育に盡し特に青年の將來を憂慮し明治三十一年九月川合學校校友會を組織し青年子弟を勸誘して入會せしめ每月十數回夜學會を開き學校職員と共に學力の補充及精神の修養に盡力せり爲に青年子弟君を畏敬せさるものなく現今有力なる地位に在る人にして君の恩顧指導を受けさるもの殆と稀なり又郡縣に於ける教育會には必す出席し其役員となり東奔西走教育に貢獻せし所少からす君の家庭教育は極めて嚴格なりしも和氣靄々嘗て風波の聲を聞かす以て其家門の圓滿なるを知るに足る君明治廿七年三月十三日を以て歿す時に年七十

二〇　柏淵樅園

先生名は重寧字は士安通稱靜夫樅園は其號なり養老郡高田町の人父祖三世德行文藝を以て著はる先生幼にして穎悟學を好み夙に家訓を受けて國典に通す又業を鬼島廣蔭に受け國文國歌を善くす遂に心を神學に潜め岡部本居諸翁の著書を通覽し大に得る所あり四方之を聞き來りて學ぶ者多し天保十一年擧けられて里正となり數村を兼攝し職に在ること二十六年嘗て砲臺費を幕府に獻し特に姓氏を稱するを許さる蓋し異數なり慶應元年職を其子重明に傳ふ明治中興の際大垣藩議事所を開く先生起て議員となる三年藩校皇學の二等教授に任し六年大垣八幡社の祠官となり權中講義に補せられ權大講義に累進し尋て南宮神社の禰宜に任し十三年職を罷む先生既に職を罷め家事を以て子に附し復世事に關せす一室を築きて風月を吟諷し優游自ら娛み常に逸人隱士と往來し人亦喜ひ歸す二十年子重明歿し君復家政を理め幼孫を敎育す二十五年七月十二日病歿す享年八十先生學問宏博最も國典に明かなり神宮祭主特に擧けて一等敎師となす東京の大敎院に遊ひ諸名宿と討論し學益進み神道事務局擧けて岐阜分局の副長となす其信任せらるゝ此の如し蓋謙恭純篤の致す所なり

祖諱は時憲貫齋と號す少時京師に遊ひ學を齋靜齋に受け兼ねて射御刀槍に通し又書法を霞樵山人に受く而して書最楷隷に長す歸て村老を補佐し晩年病を以て罷む常に肩輿養老山に遊ひ數日にして還る曰く是家山なりと平素家を治むる節儉能く人を賑恤す鄉里之に懷く父諱は嘉一蛙亭と號す性温厚篤實善く飮む然れとも能く家法を守り嚴に奢侈を戒む北山幽桂秦滄浪等に就き業を就け詩文に妙なり好て國典を讀み和歌を善くす嗚呼先生の三世其身並に鄉里を出てす名遠邇に著はる蓋獨文藝の萃を拔くのみならす而かも其德行の以て州里に儀表たるに足るものあればなり

二一　橫山三川

先生名は吉寛字は千里三川は其號なり通稱市之右衛門父名は吉住祖名は吉尹曾祖名は吉豐吉豐二十二世の祖を賴信と曰ひ佐々木氏たり元弘中從五位下に叙せられ河內守に任せられ近江國橫山村に居る因てこれを氏となす賴信十二世の孫信鐵始めて居を美濃國黑野村に移せり天明中吉豐の代に名古屋藩臣下條氏此の地を領す吉豐之に仕へ傳へて先生に至る先生幼にして學を稻富村兒島百一翁に受け長じて博く經史に涉り最詩才に富み揮毫を善くす鄉黨の子弟其敎を受くる者日夕門に滿つ先生風丰淸癯天資眞率人に接する謙退にして言ふ能はさる者の如し嘗て說を作り謙を以て天地の美德となし以て自ら之に處り又唐詩を錄し誡を子孫に遺して曰く世事從來盈則虧。十分何似八分時と其謙虛自ら養ふこと此くの如し故に門に及ふ者皆其德に感化せられ情誼靄然敬愛の狀恰も慈父の愛兒に於けるか如し明治十年九月病歿し享年六十九門人百餘人相謀り碑を谷汲山華嚴寺に建て以て先生の恩に報ひたり明治維新の際今の元勳井上侯を助けし所郁太郞氏は先生の門人なりと云ふ

二三　陸軍步兵中尉　館野多吉

日露の役難攻不落の稱ありし旅順要塞も遂に開城降服の已むを得さるに至りしは是偏に幾萬の忠將勇卒肉を以て彈と成し骨を以て楯と成し決死奮戰以て報國の誠を致せしに由らずんはあらす館野中尉の如き最壯烈なる戰死をなし凛乎たる忠誠は懦夫を立たしめ惰者を戒しむるに足る

中尉は舊大垣藩士館野與六の第三子にして明治十年十二月を以て生る人と爲り溫厚にして沈毅興文小學校卒業の後陸軍士官に志ありしも體力の未だ適せざる處あり因て寒暑風雨を論せす每朝早起して郊外に運動し晝間は英語及漢文を研修し傍ら翰墨を娛み夕には劍術を淸水氏に學び專ら意を修養と體育とに用ひたり二十八年六月東京成城學校に學び理學士脇水氏に寓す一日氏歸省し兄雄寅を訪ひ謂て曰く令弟有望の青年之を法科大學に學はしめば如何と兄之を中尉に傳ふ憚はすして曰く何ぞ初志を飜さんやと後人に語て曰く余か陸軍に志せしは遼東還附の詔勅に

感慨せしなり此志牢として抜く可らずと三十三年十一月士官學校を卒業し歩兵第九聯隊に入り三十四年少尉に任し三十六年中尉に任す三十七年二月日露の役起るや中尉は前年度の編成に因て後備隊附に在り其出征の遲きを慨し屢書を家兄に寄せ髀肉の嘆を洩せり既にして三月動員令下る乃書を飛はして曰く一日千秋大快事に接す請ふ此情味を阿兄に分たんかなと其後音信あるも事軍機に關するを以て其行動を詳報せず六月二十八日突然大阪より出征を報じ七月十七日無事上陸し爾後二回の音信唯健在を報せしのみ既にして飛電あり大津補充大隊より至る曰く八月廿二日中尉名譽の戰死と兄乃大津に急行し服部大尉に面し其戰死の狀况を問ひしも之を詳にするを得ず九月二十九日大阪天王寺豫備病院より第五中隊第二小隊長菊池少尉及ひ第三小隊長中澤少尉連署の弔詞來り且遺刀の在院一上等兵の手に在るを報せり因て兄又病院に赴き狀况を質せしも亦詳にするを得す唯遺刀を齎しゝは上等兵藤井惣吉なるを知得たるのみ而して此時已に再征して在らず三十八年二月再び大津に抵り中村聯隊長に謁し之を審にせんと欲せしも依然として不明なり

八月藤井上等兵を近江國愛知郡川原村に訪ひ始めて當時の戰况を詳にするを得たり同氏曰く八月二十一日午後八時半豫備隊たりし我第五中隊は命令により第一線に進み夜陰に乘し第三回の突擊を試みんとし一回二回の突擊に逆襲せられたる我將士の伏屍累々たる間を進み敵壘に肉薄す壘は傾斜ある高地を占め其下には强壓電流の鋼鐵條網を繞らし其地一帶には地雷を埋め高粱を刈り盡し眼界を寬くし一定の白石を排列し以て一齊射擊の照準を明にす而して壘は望臺を後にし東雞冠山北砲台を左に盤龍山東砲台を右に恰も是れ砲火交叉集中の巷なり三砲台より發する重砲彈は勿論壘上よりは機關砲急霰の如く之に加ふるに間斷なき一齊射擊を以てし照燈輝き光彈迸り砲聲殷々四山を撼かす嗚呼此の凄慘悲壯の光景想ふだに毛髮竪ち心目眩す而して我忠勇なる將士は奮迅健鬪邁往躍進すれとも隨ひて進めは隨ひて斃れ死傷狼籍其慘狀言ふに忍ひす而して我第一小隊は中尉號令の下に蓊然奮進し或は鐵條網の切斷せられたるかを候ひ或は地雷の裝置せられし處を察し射擊に繼くに射擊を以てし敵の殪れて壘下に顚落するもの七八を數ふ而して敵の號

令明に聞ゆ蓋し三十米突を離れす此の如き者數時孤軍奮戰すれども復後繼なし中尉勵聲岡部分隊長及余を麾く岡部忽傷つく中尉顧みす將に敵壘に突入せんとす飛丸あり前額を貫き一聲敵を罵りて絶す實に明治三十七年八月二十二日の曉天なり余亦兩脚を傷つき持する所の銃敵彈の爲に三折せらる乃中尉の屍體に伏し日沒するを待ち僅に中尉の佩刀を杖つき蹣跚として後方に退けりと兄は此實話に因て當時の實況を審にし始めて平素の志願を達するを得たり當時中尉の佩びし刀は同家の祖が甲斐武田氏より拜領せしものにて法性當麻と名つけ傳家の寶なり今藤井氏によつて同家に復歸せり此他遺品として出征日誌あり即ち出征の初より鳳凰山露營地に至るまで委曲叙記したるものにて兄は之を枕戴錄と名つけ紀念として永く家に傳ふ

二三　多田順暎

君は揖斐郡清水村字島受念寺の住持にして資性温厚篤實加ふるに慈善心に富み特に意志の鞏固なるは世罕に睹る所なり嘗て獨力を以て育兒院を經營し且附屬事業として私立小學を起し進んで感化院を設くるに至りしは世の既に知る所にして詳述を要せす因て君の此事業に當りし端緒及ひ經歷の一斑を叙す

君不幸にして幼時父母を喪ひ愛情薄き繼父母に因て養育せられたり是を以て世の貧孤兒に對する同情極めて深く之を見る毎に愛憫の情內に動きて自ら禁する能はす屢檀家或は知友に謀るに育兒院設立のことを以てすと雖皆前途の成功を危み進んて之を賛助するものなし君乃斷然意を决し斃れて後已むの精神を以て明治三十三年所有の土地一町五反の內一半を賣却して資を造り同年七月可憐なる幼兒三名を收容せしを嚆矢となす翌年より廣く同情者の賛助を請ひ益事業の發展を圖りしに育兒の數漸く增加し從來使用し來りし庫裏は既に狹隘を告くるに至る因て三十五年一棟の院舍を建築し爾來必要に應し數棟を增築し三十七年實業部を設け兒童をして一定の職業を習はしめ以て將來自活の道を授く此歲會々日露戰役起り國家多端の際同情者の寄附金頓に減し費用を支ふるに足らす是に於て君は殘餘の所有

財產全部を擧けて之に投し幾に事業を繼續したり平和克復の翌年十二月更に私立小學を起し以て院兒の敎育に努め四十一年豐木村に於て原野十町を購入し數棟の家屋を建築し茲に感化部を創設し世の不良少年を收容せんとす現今院兒の數六十餘名の多きに達し縣廳より恩賜慈惠救濟資金の內年額金五百圓を下賜せられ又佛敎慈善會財團より年額金七百圓を補助せらる亦以て君か功德の偉大なると成績の佳良なるを知るに足る君一男二女あり女は嫁せしめすして婿を迎へ男は妻を娶り一家を擧けて此事業に從ひ早起遲眠身を以て之に當り多數の院兒と一大家族を成し飮食起臥を同ふし恰も温穆なる家庭を見るに似たり

二四　竹中重治

君は不破郡岩手村の人父を重元と曰ひ岩手城に居り齋藤氏に屬す君字は半兵衛性沈勇温毅にして智慮多し然れとも少時恰も魯癡の如く人未だ其才幹を識らずして常に慢侮す幼にして父に繼き齋藤龍興に仕ふ其老安藤、氏江、不破等皆之を輕弄す永祿七年君年十九のとき一日稻葉山の城門に入らんとせしに櫓上に尿者あり君の頭上に注ぐ君徐ろに之を拭ひ歸りて舅安藤範俊に謂て曰く某屢戮辱に遇ふ義忍ぶへからず戲に城を襲はんと欲す請ふ援兵を賜へと範俊頭を掉て曰く我嘗て之を謀れとも未だ其機を得ず況んや子の癡鈍なる其能くせざること必せりと固く誡めて遣歸す時に君の弟重矩任子となりて城に在り會々病に罹る君乃ち一策を案し日暮を待ち甲仗を櫃に收め鋭士をして之を舁かしめ城門に到り門者に謂て曰く餐を者に病贈るなりと而して牙城に入るや遽に甲を帶びて掩擊し刀を揮て進み室老齋藤某を捕ふ鋭士皆劍槍を把て力擊す事倉卒に發し城中敵の誰たるを識らず周章脫走し死傷者多し龍興亦狼狽し僅に水門より潜去す君乃ち鐘を撞く範俊鐘聲を聞き君の所爲なりと思ひ馳せて城門に至れは固く鎖し實を門外に得たり君龍興に謝して曰く臣謀逆せしに非らず室老の驕侵を憎み君に代て顯戮せしのみと因て城を致して去りぬ實に三月十八日のことなり是より近江に往き羽柴秀吉に憑りて織田信長に屬す信長其人となりを識り命して秀吉に從ひ軍務を參畫せしむ時に年未だ壯な

らず秀吉引て腹心となし事毎に諮問す君も亦心を傾けて結納す爾後秀吉勳を累ね威を振ひし者君の羽翼の功居多なりとす元龜元年江北の人堀二郎、樋口三郎兵衛武名あり君赴き説きて信長に屬せしむ是夏秀吉の信長に請ひて前驅となり淺井、朝倉兩氏を攻むるとき君は牧村某丸毛某と之が副となりて前驅せり是秋信長越人と坂本に對抗せしとき土寇蜂起して路を遮る君乃ち横山城を出てゝ賊を撃退し丹羽長秀の賊に圍まるゝや君赴き救ひて城に入らしめ賊競ひ進みて城壁に薄まるに及び君又撃ちて之を走らす秀吉の師を播磨に出すや君毎に從ひ知て言はざるなく任遇日に盛なり天正七年春病に嬰り京師に赴き醫に就き之を療せしも數月にして瘳えず因て謂ふ我若し起たずんば寧ろ身を兵馬の間に殞さんと疾を力めて復平山の營に詣り六月遂に營中に卒す時に年三十六秀吉深く之を惜む

君間暇ある毎に讀書を好み宏量絕倫なり其甲は馬皮に漆ぬり棉絲を以て之を綴る而して居常棉襦を著く軍陣に臨む毎に令せずと雖士卒自ら奮勵す秀吉勢威稍張るに及び其智の君に及ばざるを顧ひ心私かに忌憚せり君亦之を識察し三木城の陷るに及んて遁世せんと欲し豫め浮屠の衣具を設けこれを高野に運ばしめ以て陷落を待つ偶々疾みて死せり子重門秀吉に撫育せられ歲甫めて十六にして從五位下に叙せられ丹波守と稱す子孫世々岩手村に居り交代寄合に列せられ幕府に仕ふ

二五　竹中萬之右衛門

君は揖斐郡久瀨村字津汲の人文政元年某月を以て同村に生る人と爲り篤實にして果敢平素好て經書を讀み己を持すること恭儉なり成年の後父の業を繼くに及び高橋庄七と協力して字名倉平を開墾せん爲め安政三年に起工し爾後十ケ年間事業を繼續し慶應元年に至り大繩引十町步の內七町有餘の地所を開拓し且灌漑に便せん爲に字地藏橋下より瀨ケ谷丹度を經て名倉平に至る延長千九百五十三間の用水路を開鑿したり抑此事業たるや今を去ること五十餘年前人智未た開けず一般人士の實業思想に乏しき際君率先唱導して草莽荒漠の地を開耕し且火力を以て絕壁を龜裂せしめ鐵鎚を以て之を打破し以て水路を開き之を墾地に引けり其苦心焦慮想察

するに餘あり因て慶應元年十一月十六日郡奉行より褒賞を賜ひ其偉功を表彰せられたり君は又九戸阪道を修繕して往來を便せしにより明治二年六月十七日郡政局より褒賞を賜はりたり明治三十五年八十五歳の長壽を以て逝けり

二六　忠僕爲助

忠僕爲助は百姓爲八の長男にして文政八年九月不破郡表佐村に生る十九歳の時より南宮神社社司宇都宮由秀の下僕となる二十五歳の時父重症に罹りければ時々家に歸り其弟と共に看護怠なかりしも遂に死亡したりされば爲助は暇を乞ひて家を繼かさるべからず然れとも其頃主家には災厄荐りに臻り主人の妻病を以て歿し二年を經て主人亦病歿し而して長男は父に先ちて已に夭折し長女次女は皆他に嫁し唯次男秀尙の家に殘れるのみ然れとも年尙幼にして一家を管理するの能なく此外二人の下僕と一人の下婢あれども皆誠意を盡くす者なし故に宇都宮家當時の狀況は恰も暗夜に燈を失ひたるが如く何人をも信賴する者なかりき元來忠實なる爲助は主家の現狀此の如くなるを視て辭し去るに忍びず吾家を弟に讓り且終生妻を迎えず專心主家を助け恰も後見人の如く其保護に盡力せりされば秀尙は弱年にして社司職を襲きたるも別に過誤失態のことなかりしは一つに爲助の後援ありしに因るなり又爲助は讀書の趣味深く書肆より貸本を借り來り夜間務を終りたる後吾室に入り深更に至るまで愛讀し之を最上の樂とし決して劇場等に歡を買ふことなし常に節儉を旨とし貯金を怠らず主人漸く長し已に妻兒を得るに及びても家人の信賴益々厚く事每に問はさることなかりきかくて三十餘年間忠實勤勉を以て主家に奉仕し既に主家の確立し復憂ふべきなきを視終に辭し去れり時に年五十一其後南宮神社より使丁を依囑せられ此に再ひ忠實の行爲を顯はし薪炭茶油の如き能く之を節用し決して徒消せず又寒夜と雖爐を用ゐず寢ぬるに衣を脫せず其平素の用意懇切にして行爲の誠實なる社司社員及び村民をして感嘆措く能はさらしむ明治三十七年二月川路知事の奉幣使として宣戰の報告祭を南宮神社に行ひしとき此を聞き大に賞揚し地方に於ける訓話の材料となしたり爲助は八十歳にして始めて暇を

乞ひて閑居し以て餘命を樂み四十年某月を以て歿せり

二七　溪　操　子

母の思ひは空に滿ち行衞も知らず果てもなしこは親の子を思ふ至情の天地の間に擴かりて廣大無量なるを謂ひしなりされど總て女性の常として唯愛に溺れ却て最愛の子をして其終を全ふせしめしは稀に見る所ならむ而るに情に偏せずして遂に大名を致さしめしは文學博士南條文雄氏の母堂謙敬院釋順操其人なり

母堂名を操子と云ひ岐阜縣安八郡北杭瀬村字木戸壽光寺順流情の長女なり十六歲にして大垣船町誓運寺溪毛芥に嫁し五男三女を擧ぐ博士は實に其四男なり常に庭訓を垂れて曰く

昔時華嚴宗の碩學に鳳潭といふ人ありしが嘗て其學友數輩と講を聽くに義門高尙にして要領を得ず聽者次を逐ひて減せり講師因て講座を中止すへき由を傳ふ時に潭一策を案出し伏見人形を堂に列し聽衆に代ふ蓋聽講者の多くは偶人に均しきを諷したるなり師其志に感じ遂に潭一人の爲に講話の勞を執りしと云ふ是れ今に人口に膾炙する所にして潭の佛界に錚々たる故なきにあらさるなり汝等此意を體し決して偶人の伍となる勿れと又嘗て狂歌を引用して兒等の故なくして群衆に交はり有爲の時機を空費せしことを誡め專心讀書せしめたり歌に曰く

上は來ず中は來て去ぬ下は泊る下々の又下は流連をする

と猶平常時間を正しく守るべきを敎へて曰く

僧侶は信施以て衣食するものなり三寶供養の爲め招請を受くる當日などは豫約の時間に遲くるゝこと勿れ若し遲刻することあらんか初回は師家に支障の俄に起りたるならんとし深く咎むることなからんも之を再びせは師は何故に違約するか其故を質さんと不平の言語交はるべし而して猶怠ることあらは遂に罵詈侮辱の語氣口を衝いて出てんと懇に時の守るへきを戒められたり

二男刺山大泉寺に住職す頃者母堂操子の慈訓諄々倦むことなく慰諭悃々至らさるなかりし昔時を追懷して左の詩あり

慈訓怳然猶在耳。嗟吾心緒亂紛々。展來肖像奠香火。阿母若言兒若聞。

二八　槌谷祐七

君は安八郡大垣の人嘉永五年正月二日を以て生る資性温恭にして沈着度量寛宏にして堅實なり遜讓以て人に接し愛敬以て人を待つ是れ衆人より敬慕を受くるのみならず亦祖先の遺業を完からしめし所以なり祖先は遠く寶暦年間に家を起し世々菓子業を以て立つ故に其主業とする柿菓は勿論其他の製菓も家傳によるもの多しと雖君が學理を應用し考案せしものも亦少からず明治十一年家業を繼き爾來專心製菓の業に從事し敢て利益を目的とせす唯品質の佳良なるものを製するを以て本務とせり今其改良を加へし一二の例を擧くれば柿菓精製に關し幾多の星霜と經驗とを積み容易に柿核を除去するの便法を按出し且柿羊羹の容器として從來用ゐ來りし箱詰擇包等に代ふるに半月形の竹器を以てし貯藏輕便高雅の効を現はせり此等の改良により　兩陛下及東宮殿下に奉獻を許され且宮內省御買上品たるの榮を受く又明治二十三年第三回內國勸業博覽會を始とし各種博覽會共進會等に出品し賞牌褒狀を受けしこと三十有四回其他巴里、聖路易、北米波士蘭萬國博覽會等に於て名譽ある賞牌を受けたり今や業務を擴張し販路日を逐て開け各所に製造所を設け年內多數の職工を使役し其主業とする柿羊羹、柿ぜりー、柿ジヤムのみにても年內約三十萬本を製し其價格四萬五千圓に近く其內米清英佛諸國に輸出するもの貳萬五千圓に近しと云ふ君の職業に忠實にして改良に熱誠なる內は以て縣下の名產を發揮し外は以て他邦の信用を增進し其斯業界に重望を屬せらるゝも亦宜ならずや今其屬望の一斑を記さんに大垣菓子製造業同盟會會頭に推され且各種博覽會共進會品評會の審查員を囑托せられしこと十數回の多きに及べり近來又大垣町會議員、大垣商業會議所常議員、大垣商業學校商議員、大垣商工協會商議員、岐阜縣山林會特別會員等の職を帶べり君本年五十八歲尙身体健全にして將來企畫する所蓋亦鮮少なからさるべし

二九　陸軍中將　塚本勝嘉

大垣藩出身の士にして職を軍國に奉し力を戰陣に致し功を建て名を顯し榮進將官に至りしもの二三にして止らずと雖大小幾百の戰役に參加し山野に曝露し干戈に枕席し膽略縱橫武名赫々たるもの蓋塚本中將を措きて他に其傳を見ず中將は弘化四年を以て大垣町に生る資性英邁沈毅にして最記臆力に富む陸軍將校として始めて東京に至るや公務の餘暇百般の書籍を通覽し且先見の明を以て當時世人の口にせさりし書物を誦讀し其强記驚くべきものあり而して事を處する剛膽機敏にして些の擬議を挾ます人と交るに欣歡談笑曾て城府を設けず又書生を愛撫し一たひ望を屬すれは資を投して業を修めしめ其成功を觀るを樂となす故に書生の其恩顧に因て目的を成就し現に榮職に在る者少からずと云ふ

中將は明治五年始めて陸軍少尉に任せられ同七年佐賀の役に征討總督憲兵隊附となりて出征し尋て臺灣征討の事起り同年十月歩兵第一大隊附となりて同地に從軍

し數月にして凱旋す同十年西南の役起るや歩兵第十四聯隊に屬し高瀨に向て進擊せんとし連日各地に轉戰し肥後國玉名村に於て右脚を負傷し久留米病院に入り同年四月治癒し再ひ從軍して各地に戰鬪し遂に大尉に任せられ歩兵第十三聯隊第一大隊第一中隊長に補せられ熊本大分鹿兒島各地に進剿奮鬪し同年十月凱旋せり十六年二月歩兵少佐に任せられ歩兵第四聯隊第三大隊長に補せられ十七年十月近衞歩兵第二聯隊第一大隊長に補せらる十八年七月中國御巡幸の際供奉を命せられ親衞警護の任に當れり二十三年十一月中佐に進み歩兵第六聯隊長に補せられ名古屋に赴任す二十七年日清の役起るや同聯隊を率ゐて出征し九月九日宇品を出帆し韓國元山津に上陸し鴨綠江、虎山、大東溝各地の激戰に參加して驍名を顯はし十月大佐に進む十一月以後岫巖、潘家堡子、海城、缸瓦塞等の各地に進擊追討し能く諸軍の連絡を保持したり二十八年七月凱旋し功四級に叙せられ金鵄勳章を賜ふ二十九年六月陸軍大學校長に補せられ三十年四月第六師團參謀長に補せられ九月少將に昇任し歩兵第二十一旅團長に補せられ山口に赴任す三十三年北淸事變の起るや出

征の命を蒙り七月を以て出帆し清國西太沽に上陸し北倉、安平、馬頭、長家灣の各地に迂回轉戰し北京城一角を降陷せり此役歐米列强と行動を共にし能く我國威を發揚し列國をして我兵の勇敢にして規律の嚴正なるを驚嘆せしめたるもの實に少將の力與て多きに居ると謂ふへし是より中將の聲譽は列國に宣揚し各國の帝王より諸種の勳章を贈與せられたり三十四年七月凱旋し功三級に叙せられ金鵄勳章を賜ふ三十七年二月日露の役起るや又清國に向て出征し四月某日を以て張家屯に上陸し得利寺、蓋平、大石橋、拆木城、海城、鞍山店、遼陽等各地の戰鬪に參加し或は夜襲戰に或は迂回戰に或は牽制軍に或は突擊軍に隨時赫々たる武勳を顯はし九月三日を以て中將に任せられ第四師團長に補せられ沙河の會戰に戮力合擊して敵の大軍を擊退し茲に諸軍團と共に持久對陣し三十八年一月黑溝台の戰以後奉天城の會戰に至るまて恰も要塞の陣形を成し砲壘塹壕等の軍備次第に完整し兩軍の砲戰若くは襲擊互に行はれ日夜嚴警寸時の休養を許さす中將此間に在て能く士卒を奬勵鼓舞し同師團の名譽を發揮したり三十八年十二月大阪に凱旋し三十九年勳功を以て功二級に叙せられ金鵄勳章を賜ふ同年七月第九師團長に補せられ金澤市に赴任し四十年九月男爵を授けられ華族に列し十二月從三位に叙せられ四十二年某月病に依て師團長を辭し專ら靜養を事とし同市に留寓せり

聞く中將の一旦出征の途に上るや家族に向て一片の音信を發せす曰く君國の爲め已に一身を捧くるもの安そ家族を顧みるの暇あらんやと又戰後凱旋するや家族は他人より之を傳聞し始めて其期日を知れりと云ふ是れ中將の今日有る所以にして尋常武弁の企及す可らさる所なり

三〇　坪井伊助

君は揖斐郡本鄉村字草深の人天保十四年七月を以て生る君幼より木竹草花の栽培に趣味を有し天分の存する所夙に其才華を見はせり年十四のとき父母を喪ひ爾來父祖の業を襲き農林の事に從ふ特に意を產業の發達に致す十六歲のとき選ばれて里正となり一意村治の改善と村經濟の圓滿を圖り或は學校を新築して敎育の普及

を促し或は村民を奬勵して殖産興業の發展に努む萬延元年桑苗の良種を購入して之を試作し其種苗を村民に頒てり又道路交通の便を計り新鑿改修せし所少からず其他山林植林の業を奬勵せん爲に杉苗、欅苗、落葉松苗、三椏苗等數萬本を郡內各町村に配布し又櫻樹を鎌ケ谷に移植せしか如き最も其著しきものとす明治八年同村大谷山の砂防工事を計劃し自ら數百金を投して其工事を竣成せり十四年以來專ら竹林事業に從事し各地を歷遊視察して之が研究を積み遂に淡竹林自然枯豫防法及竹林改良に關する著述をなし之を世上に頒布し大に稗益する所ありき君の邸內に於る竹林園は其種類數百の多きに達し君は日夕其中に徜徉し研鑽以て樂となす世呼んで竹林翁となす寔に其當を得たりと謂ふべし君亦竹林翁を自任し力を此に傾注すと雖農事の改良に至つては常に苦心經營する所ありて終始渝はることなし彼の耕地整理、作種の適否、苗代田の改良、產米の改善、害蟲の驅除等に關しては實行以て其範を示し又麥稈眞田製造傳習所の開設に盡力せしが如き其公益の爲に盡碎せしこと頗る多し今や揖斐郡は農事の改良進步著しく他郡の模範となるに至れるもの君の力與かりて居多なりとす是を以て鄕黨の敬慕益々深きを加へ或は郡村農會長に推され或は郡會議員及び縣會議員等に選ばれ熱誠以て其職責を盡せり家頗る富裕なりと雖己を持すること質素なり灑落以て人に接し開襟以て歡を盡くす今や六十七歲の高齡に達するも早起して栽培試作等に從事し嘗て懈怠することなし蓋し是れ常人の能く及ぶ所に非るなり

三一　文學博士　南條文雄

君は嘉永二年五月十二日を以て安八郡大垣船町誓運寺に生る父を溪英順と曰ひ毛芥と號す君は其第三子なり七歲の時より菱田海鷗に學ぶ十一歲以後は家塾に在りて專ら經史を修め詩賦を習ふ傍ら野村藤陰に文章の添削を請ふ慶應二年大垣藩僧兵隊を組織するに及び之に加はる四年正月同隊を解くに至り君乃ち京都に赴き本願寺學寮に入る成績常に拔羣たり故を以て明治元年六月學階擬寮司に進む二年七月大垣に歸り盛に經史を講說す四年正月越前國南條郡北杣山村金粕憶念寺住職南

條神興の養嗣となる六月寘司に進む五年五月本山事務所の錄事となり大に盡す所あり九年六月選拔せられて英國に航す爾來倫敦に在りて專ら英語を研習し十一年二月オクスフォルドに轉學しマクスミユーラル博士に就きて梵語文學を研究す十七年三月オクスフォルド大學よりマスター、オブ、アーツの名譽ある學位を授與せられて歸朝し十八年三月東京大學文學部の講師及大谷敎校の敎授となり主として敎育の事に任ず二十年一月印度に渡航し同國古聖の遺跡を巡詣して遂に支那に入り天臺山に登り又杭蘇の間に漫遊す同年五月無事歸朝す六月養父歿せしを以て君其後を襲ぎて憶念寺住職となる二十一年名古屋普通學校長となり尋て法雨協會長となる同年六月文學博士の學位を受く二十三年囑托を受けて華族女學校に英學を敎授す二十七年之を辭し京都第一學寮長となる其後本山の顧問大谷派新法主の侍讀、特派布敎使等となり遂に權大僧都に補せられ名聲益々揚る三十六年眞宗大學の學監となり以て現職に至る著す所梵文阿彌經講義、無量壽經、阿彌陀經梵本和譯大明三藏聖敎目錄、英文譯補、法華經梵本和譯等にして殊に法華經梵本の如きは五部の寫本を校合したる珍本にして近來露國首府の佛典原書出版會をして刋行せしめんと周旋する人泰西の學者中にも有りと云ふ

君又日夜尙研學を怠らす諸方より講演及び揮毫等を依賴せられ殆と寢食に遑あらざるか如し而かも君は謙遜にして其能を知らざるが如し談笑自在城府を設けず接する者をして春風に面するの思あらしむされば先師マクスミユーラルの如きは特に君を愛して其學を大成せしめ君をして日本の梵語文學を開拓せしめんとしたりしなり君厚く先師を敬慕し曩きに大學及び君と高楠博士とに對しマクスミユーラル夫人より送付せし先師の寫眞を居宅の楣間に掲げ日々追慕敬愛の念を致せり君昔時初めて京都に赴き本願寺の學寮に在りし時は學資常に缺乏を告げしも更に屈せず往々徹夜筆耕して食資を辨せしこと一ケ年餘に及びき又英國留學中にも或事情の爲に學資の延着を生ぜしことあり因て特許を得て印度事務局の圖書室に入り大藏經を閱覽し明藏目錄を譯補して一百磅の報酬を得以て衣食等の資に充て殘額は悉く書籍購求費とせしことありと云ふ要するに君は幼年のときより苦學の功を

積み成業の後も猶學問研究の事を廢せず咀嚼尋繹老の至れるを知らさる者の如し洵に好學篤行の人と謂ふべし

三二　工學博士　那波光雄

君は那波光儀の長男にして明治二年八月を以て大垣町字袋に生まる資性温厚にして勤直明治二十三年第一高等學校第二部の課程を修了し直に帝國大學土木工學科に入り學術優等の故を以て特待生に選定せられ廿六年七月卒業し關西鐵道會社に招聘せられ木曾河口の大鐵橋工事を擔任し最苦心慘澹を經始めて竣工せりと云ふ今該工事請負師代表者某の談を聞くに君は職務に對し極めて熱心にして且親切なり一旦宣言したることは飽まて遂行せされは止ます然れとも翻然其非を悟らは如何に固執する意見も忽ち捨てゝ理に從ふの速なる君の如きもの少し且苞苴を以て君を動かさんとするが如きは到底望むべきに非らす但君に當るへきものは道理の一途あるのみ彼の大鐵橋の今日十數年を經過するも堅牢にして些の損害を受けさるは全く君の工事に對する親切熱心より出てたるに外ならすと亦以て君の心事の高潔にして技術の卓拔なるを知るに足る三十一年十二月同會社建築課長を委囑せられ能く事務を整理し基礎を鞏固にし大に盡碎する所あり三十二年七月京都帝國大學助敎授に任せられ土木工學第二講座分擔を命ぜらる卅三年六月土木工學研究の爲め滿二年間獨逸國に留學を命せられ八月神戶を出帆し同國に赴き工學の蘊奥を極め且英佛墺伊瑞米六國に轉遊研學し博覽宏聞君の識見をして益高からしめたり卅五年十二月歸朝し京都帝國大學理工科大學敎授に任せられ土木工學第四講座擔任を命せらる卅七年四月同大學總長の推薦に基き工學博士の學位を授かり卅九年八月九州鐵道會社の技師となり宇佐大分間線路の調査に從事し十二月宇佐出張所長となり建設の事業に當り日夜拮据勉勵し嚴正篤實を以て部下を奬勵すること曾て關西鐵道の事業を完成せしと等しきのみならす益學理と經驗の効を發揮せり四十年六月國有鐵道となるや帝國鐵道廳に轉任し七月同廳建設課勤務を命せられ四十一年四月技師に任し高等官三等に叙し中津建設事務所長を命せられ今現に其

職に在り君の性行學殖既に此の如し前途の榮達洋々乎こして海の如きものあり

三三　成瀬政右衛門

君は揖斐郡大和村字上南方の人にして家世々農を以て業こなす性剛毅堅忍夙に開墾の志を抱き所有の宅地は勿論寸地の荒蕪するものあらは之を開拓して田圃こなすを以て樂こなす明治八年君六十歳のこき今の大和村字桂山の原野二町餘を買ひて開墾し茶圃こなせしも收支償はさりしを以て人皆之を嘲笑せり君更に屈することなく種々經驗を積み遂に土質の桃樹に適するを考へ明治十二三年頃桃苗三千株を植付けしに成績果して佳良にして數年の後より歳々貳百圓内外の收益あるに至れり爾來村民は君の志に從ひ年々開墾の歩を進め今や十五町の多きに達し唯桃實のみにても四五百圓の產額を得其他桑桐野菜雜穀等を合すれは優に千圓の收穫を見るは是れ君か不撓不屈の精神を以て率先指導せし功に因らずんは非らず傳聞く君八十歳のこき人に語て曰く余如し七十歳ならは北海道に移住して開拓を試みんものをこ亦以て如何に元氣の旺盛なりしを察するに足る明治三十四年八十六歳にして沒せり

三四　武藤榮治郎

君は明治八年二月二十六日を以て揖斐郡谷汲村字名禮に生る幼にして父を喪ひ母に依て養育せらる家素より貧しけれは幼心にも母の艱苦を想ひ常に家業の助力をなし既に學齡に達するも他の兒童の如く就學するここ能はず野に草を刈り山に薪を採り以て日々の生計を助けしが慈母の温情こ君の熱心こは能く多大の困苦を忍ばしめ遂に小學に入るを得たり君人こ爲り穎悟剛毅にして縱令ひ他生に後れて入學せしも半歳を出でずして上級に編入せられ在學三年優等の成績を以て尋常科を卒業せり尋て高等小學に入るが如きは生計上一層の困難なりしも優等の成績こ非常なる熱心こは更に慈母をして多大の苦痛を忍ばしめ遂に入學するに至りしが亦成績優等の爲め六ケ月の後二年級に編入せられ又二年級より一躍四年級に登り僅

に前後五年を以て八年の小學全科を修了し而かも其成績は常に拔羣なりき君の住家より高等小學校に至るまで一里半の山道なりしが途上常に書を讀み手に卷を釋さす人之を見て勉强を衒ふとし嘲笑するものあるも更に意と爲さず歸途には種々の荷物を脊負ひて賃銀を得之を以て月謝及び學用品を辨じたり卒業後自村の小學校に雇はれて助手となり明治二十六年岐阜縣師範學校に入り三十年三月優等の成績を以て卒業したり猶進んで高等の學校に入らんと欲するも家に老母の在ると生計の裕かならさる爲に鬱勃たる精神を抑し育英の暇を以て螢雪の功を積み三十二年文部省の檢定試驗に及第し教育科の免許狀を得三十五年には又修身科の免許狀を得岐阜高等女學校在職中に於て愛知縣師範學校長三浦氏に知られて同校に轉任し校長の信任益々厚く且待遇亦薄からざりしも既往を顧み將來を思ひ今の時に於て奮發努力する所なくんば他日噬臍するも及ぶ可らずと茲に遠大なる希望を抱き妻兒を鄕里に托し母を伴ひて上京し暫く職を私立學校に奉して講師となり傍ら著作に從事し餘暇を以て私立日本大學に通學し始めて法律學の研究をなし斯くて一年を經過する間に刻苦して得たる貯金は爾後一兩年を支へ得るに至りしを以て斷然職を辭し專心法律學を修め研鑽二年の後同大學を卒業し尋て最も困難なる高等文官試驗に應して合格及第し四十年十二月農商務省山林屬に任せられ四十一年四月山林事務官補となり秋田大林區署在勤を命せらる是に於て始めて君の素志の幾分を達するを得たり

三五　武藤山治

我國紡績事業界に在りて其規模の最も宏大にして其產出の最も多額なるもの先づ指を鐘淵紡績會社に屈す而して其支配人となり常に指畫經營する所あるは即ち武藤山治君となす

君は海津郡海西村大字蛇池の人佐久間國三郎の三男にして慶應三年三月を以て生まれ武藤松右衛門の嗣子となる幼時より擧止頴敏にして公平の眼を以て人を統御するの才幹は早已に備れり故に十歳の頃より附近の兒童と遊戲するに每々自ら大

將に擬し以て指揮の任に當れり十四歳の春笈を負ふて故郷を出て東京慶應義塾に入りて研學し卒業後遠く海外に漫遊を試み大に視察する所あり歸朝後都下某新聞社に入り盛に機械工業の將來に尤も有利なることを鼓吹したり後二年にして社を辭し三井銀行員となり銀行事務に勵精し同銀行が神戸市に紡績工塲を設くるに及び選ばれて之が支配人となる鐘淵紡績の今日の盛大を極むるに至りしもの實に君の力與かりて居多なりとす而して君が斯界の雄として推重せらるゝ所以のもの亦偶然に非らざるなり

君は非常なる勤勉家にして專心事に從ふを以て無上の快樂となし在職十五年の久しき事故の爲に欠勤したること極めて稀にして日曜日の如きも常に出勤執務し以て事務の整理に力め特に時間を守ること嚴にして日夕の起臥は勿論食事面會等も必ず一定の時間に依て行ひ決して徒費することなし是を以て部下の事務員及び數萬の工女も自ら君の行動に感化せられ身を持すること謹愨にして能く勞苦に甘んじ勤勉職を執るに至れり君は日曜日の午後を期し必ず部下工女を一堂に會し種々興味ある談話をなし大に精神上の慰安を與ふるが如き最も君の德望をして高からしめ部下の喜んで業に勉むる所以實に茲に存せり明治四十年家政上の爲め一旦職を辭したり此際會社は金貳拾五萬圓を贈り以て君の功勞に酬ひたりしに君之を專受せず内拾萬圓を割きて部下に配與したり後家政の事整ふに及び再び聘せられて同社事務取締役となれり

三六 雲谷任齋

翁は舊大垣藩士水野忠移氏の第二子なり年二十一出でゝ同藩士兵藤瀞氏の家を繼ぐ因て其の氏を冐す初の名は寛介又弘と呼びき字を毅卿といひ別に坐馳又は截石と號せり明治維新の後戸籍改正の際更に氏名ともに改めて雲谷任齋と稱せり蓋し雲谷は其の先三河國渥美郡雲谷村に出づるに因るといふ弘化四年五月家職を嗣ぎ臺所組となる翌年二月擢られて擬講官に任ぜらる時に年僅に二十二世以て異數となす嘉永四年四月進て典籍となる安政二年十一月主簿を兼ぬ典籍主簿皆藩學校敬

敎堂に關する職なり同四年十二月翁が多年敬敎堂の職務に精勵なる廉を以て金員の賞賜を受く萬延元年十月聖廟臨時改築掛を命ぜらる翌文久元年九月聖廟成るに及び金員の賞賜を受く同年十月江戸詰を命ぜらる在役一年にして歸藩す慶應二年藩に救荒事宜編纂の擧あり翁其の編纂係を命ぜらる同年又敬敎堂に寄宿寮習書寮造築の擧あり翁又其の造築用係を命ぜらる後累遷して遂に詰組格に班し明治元年六月講官に進む同時に藩議院の議員を兼ね又神祇調方を命ぜらる同二年職位七等に敍せらる尋いで五等に進み且金品の賞賜を受く同年十月皇學所取立方を命ぜらる同三年六月寄宿寮副舍長を命ぜらる七月大會頭兼勤を命ぜらる同十月敬敎堂學則改正係を命ぜらる尋いで二等敎授に任ぜらる翌四年官各藩に令して人才を徵す翁其の選に預り上京同三月神祇官宣敎係を命ぜらる幾ばくならず廢官となり歸藩す同年七月廢藩置縣の制出で且官始めて文部省を置き學制を布くや藩立の學校は悉く閉校となると同時に翁の藩職も亦皆解免となる是に於いて翌五年五月翁は自主唱となり時の有志家高木晩翠、一柳元吉、飯沼武右衛門、谷九太夫等の諸氏と謀り官に請ふて四民共同の私立學舍を興す名づけて興文舍と云ふ實に我大垣小學興文學校の濫觴なり翌年一月官之を採用して公立とし大垣小學興文義校と改稱す時に翁は其の皇漢學二等敎授に任ぜられ又其創立と維持とに功勞ありし廉を以て官より金品の賞與を受く同六年五月神宮敎大敎正近衛忠房公諸國を巡回し大垣に至るに際し敎導職試補に補せらる尋いで縣社岐阜伊奈波神社祠官に任ぜられ兼ねて敎導職權中講義に補せらる又同時に岐阜縣第一中學區視察巡講師兼遷喬義校皇漢學敎授に任ぜられき蓋し遷喬義校は今の岐阜中學の前身なり當時翁が斯く各種の職を兼務せしを見ば其日夜斯道に盡砕貢献せる蓋し尠少ならざるを知るに足る伊奈波神社の如きは頽破見るに忍びざるものありしを翁奉仕するや刻苦經營大に其の面目を改めしといふ然れども翁生來蒲柳の質長く繁務を執るに堪へず在職年餘辭して大垣に歸る是より帷を垂れ專ら後進の敎養に勤む晩年神宮敎會の聘に應じ復起ちて大講義の職を帶び布敎に從事したるもたまたま中風症に罹り爾來荏苒癒えず遂に明治二十二年八月五日大垣町字馬場の自宅に歿す享年六十三城北宮村

星晨寺に葬る門下の人私に謚して好古先生といふ後數年を經て其の碑を今の神宮奉齋會域内に建つ

翁は幼より學を好み暇あれば則ち書を讀む其の家用を帶び他に出づる時と雖ども必ず書を懷にするを常としたり年十五にして既に素讀を菱田毅齋に受く爾來專ら儒學を講ず傍鬼嶋廣蔭に從ひ國典を修む故に翁の學は和漢を兼ぬ就中深く經義に通ぜり翁の伯父水野陸沈翁は藩主戸田侯の侍講にして亦當時の名儒たり故に幼より其の薰陶教化を受くる事も尠からざりしなり又翁は一年役に東都に就くや其の期を利用して塩谷宕陰の門にも遊びたり依て其の造詣甚だ深かりきといふ著書は日本外史標注、唐宋八家文讀本標注、皇國千字文標注、標注左氏蒙求等の數種あり皆世に行はる而して是等の書は皆翁が後進教養の餘暇に成れるもの就中外史標注は翁が最も熱精を注げる者の由なれども外史の書たる元山陽の原著たるの故を以て當時賴家の名義を以て刊行せざるを得ず依て世に公行せる者には表面賴復二郎標注と記載したるも其の實は翁の專述の書なりといふ翁は敬神の念最も厚かりしと同時に儒を信奉すること亦甚深かりき其の敬教堂に於ける聖廟改築の擧の如きは全く翁の熱心なる經營に因りて成れるなり

抑翁は率意朴訥の人にして浮華を喜はず世利に走せず只教學を以て己の任とせり其の人と交るや一少事と雖必ず其の道の由る所を究め其の理の在る所を盡さゞれば止まざるの風ありき是を以て時に或は俗に容れられざりき然れども其の後進を教ふるや講授諄々曾て厭倦の色あるを見ず其の書を講ずるや先づ服裝を正し容儀を整へ然る後席に着くを常とせり凡起居進退より一言一行と雖之を苟もせず只實踐躬行以て之を率ゐき是を以て門下の者亦皆翁を尊親し如何なる惰生も如何なる粗笨の者も翁の前に出づる時は恭敬謹嚴ならざるはなかりきといふ翁の配を奥田氏といふ二女を擧ぐ後藤致一氏を養ふて嗣となす次女之に配し長女は他に嫁す

三七　陸軍步兵大尉　井深佐太一

君資性温恭朴直平素極めて寡默なるも事に臨みて果敢剛毅なり最も讀書を好み暇

あらは自己の修養に餘念なかりき

君は揖斐郡小島村字市場の人明治九年八月二十三日を以て生る父を伊平と曰ふ農業及び水車業を營めり君成長の後岐阜中學校に入り二十九年三月一年志願兵の試驗に及第し同年十二月歩兵第十九聯隊に入り三十年十一月除隊歸郷し三十二年二月歩兵少尉に任せられ三十六年三月中尉に任せらる三十七年日露の役起るに及び第九師團兵站基地司令部附を命せられ九月十三日旅順攻圍軍に參加し十七日第七聯隊第二中隊長代理を命せられ日夜軍務に盡砕し部下を愛撫激勵し既に鉢卷山攻撃等數回の激戰を經たるも身に微傷を負はず精神益々加はり意氣益旺なり十一月二十五日第二中隊長に任せられ翌二十六日旅順第三回總攻撃を開始せらるゝや君は他の中隊と共に同日夜十一時を期しH高地を攻略するの目的を以て數倍の敵中に突撃し進んで盤龍山西砲臺支那圍壁の一角に血戰激闘し遂に壯烈の戰死を遂げたり此時中隊二百五十名の內健在者僅に二十名負傷者八十名他は皆戰歿せり功を以て勳六等功五級に敍せられ金鵄勳章を賜ふ

君出征後郷校の爲に絶えず通信し航海中の狀況遼東半島の形勢及び陣中生活の實況等一々詳記報告し又出征日誌を作り日々の軍務及び所見を細録し戰死前々夜に至て絶筆す其行文甚た巧にして硝烟彈雨の間に成るものゝ如くならず誠に沈毅の士に非らされば能はざる所なり君の從卒關谷某戰後に君の遺骸を索めて之を葬り其遺骨及遺物を齎し還り詳に戰死の狀を報告したり

三八　野村了祐

師は文化七年二月二日越中國新川郡泉村正覺寺に生る幼名を博仁と稱す後先師了宗の一字を冠して了祐と改む弘化元年二月縣下揖斐郡北方村長慶寺住持となる

師人と爲り堅忍不屈にして事を爲すに功を遠きに求め決して姑息の計をなさず初め漢籍を修め尋て佛典を修め岐阜市船橋了宗の學寮に在ること十五年博く宗乘を研鑽し造詣頗る深く學寮千有餘人の高弟となる弘化元年寮を辭して北方長慶寺に入り學寮を創設し講筵を開く遠近緇素師の學德を想望し來て敎を乞ふ者數百名の

多きに及ぶ僧約及び制法を作り朝夕の禮儀、坐作、進退及び制裁等の事を條記し入寮の際之を讀聽かしめ之に違背せざることを誓はしむ師の講演する所は眞宗教義を主とするも天台華嚴等の諸乘に涉りて汎說し且時々儒籍を講說し佛典の見地に據りて立論し頗る興味あり其弟子に誨ふるや懇切周到にして諄々倦まず各自の將來に關しては一々指導し訓誡し過誤なからしめんと欲すること恰も慈父の其子の將來を念ふが如し師の門下より出てゝ勸學の學位に列せられし者二人曰く藤田行善曰く谷口義教其他宗教界に活動し令譽を揚けたる者少からず

師は深く先師の恩義に感し其在世の間は絕えず訪問して或は質義し或は代講し其道程七里必ず草鞋を穿ちて步行し未だ嘗て駕を藉らず人其故を問はゞ即ち曰く弟子にして師を訪ふ豈驕態あるべけんやと其師を重ずること此の如し先師一日來り尋ね其講筵の盛なるを見欣然として曰く我瞑するも可なりと其師弟情誼の芳淳なること亦此の如し先師歿後は專ら自坊に在りて沈潜尋繹し時に招に應し他出するも駕中書を釋てず旅窓に在るも亦廢せず齡古稀を踰ゆるも夜十二時を過ぎざれば寢に就かず其氣根の健强なる今世稀に見る所なり平素節約を重んじ粗衣粗食一紙半錢の微と雖之を忽にせず此の如くにして蓄得たるものは率ね佛前の用具に費し或は堂宇を修理し或は厨房を新築し殆と舊觀を一變せり此等の費用は一切自辨し他の勸募を須ゐざりき先師の嗣子早世して繼者なし門徒等師の來住を望み之を乞ふこと再三に及ぶも固辭して曰く先師の寺院は吾寺院より壯麗なり人情彼を望むこと固より然り然れとも一旦因緣ありて此寺に住す今にして此を舍て彼に就く是れ義に非らず吾は世の輕薄者に伍する能はずとて遂に往かざりき

三九　野村藤陰

先生名は煥字は士章藤陰は其號なり幼字を喜三郎と曰ふ天保年中龍之助と改む考は諱を龍左衞門と曰ふ大垣藩卒にして井上左衞門の組下に屬す妣は大野郡下方村の農加納某の嫡女なり文政十年正月先生を生む先生幼にして穎悟學を好み天保十二年元服の後乞ふて藩校致道館に入る居ること三年學大に進み同十五年歳十八に

して井上左次郎佐藤孝之亟等と與に館の助敎となる爾後職に在ると數年勵精敎務に力め賞賜あり嘉永三年父病歿し其後を襲き母に乞ふて大阪後藤松陰の門に入り翌四年更に津藩齋藤拙堂に學び嶄然頭角を見はし學問文章大に進む安政元年業成りて藩に歸り敬敎堂の講官に擧けらる是歲十一月藩命を以て江戶に之き公暇を以て贄を塩谷宕陰の門に執る此間學業愈進み而して公に奉すると忠正なり故に屢金品の賜あり慶應三年祿五十石を賜ひ學館の督學並に參謀の職を授けらる當時世態漸く紛紜各藩相警めて應變の策を講す我藩老に小原鐵心あり烱眼夙に大勢を看破し後進をして文武を練習せしむ先生鐵心の知を受け上は藩侯に侍講し往々機密に參し下は藩校に群才を陶冶す明治戊辰の十一月評定局の設あり乃擢んでられ上局の副總裁に任す後大垣藩小參事に任し專ら學政を司る同四年大藏省租稅寮九等出仕に任し六年六月病を以て職を辭し大垣に歸臥す爾後鄕里に帷を下して經史を諸生に授け傍ら興文義校敎員總轄、師範研習學校監事、同校豫科敎員、岐阜縣第一中學兼岐阜縣師範學校敎員、興文學校附屬豫備學校漢學敎師、華陽學校大垣分校敎諭、同本校敎諭に歷任し陶冶する所の俊才其數を知らす西濃より出て丶多少の名ある者其敎を受けさる者稀なり明治十八年七月敎諭の職を辭す後明治二十七年大垣中學分校の敎授を囑托せらると雖一年にして又之を辭し爾來身を閑雲野鶴に寄せ詩酒優游時に或は船南馬北跡を四方に托すると有りと雖到る處唯悠々たるのみ明治三十二年三月夫人と與に大垣に歸る故舊爭ひて歡迎す偶疾に罹り月の十五日遂に溘焉簀を易ふ歲七十三遺命により遺骨を東京本鄕長泉寺に瘞む配增田氏三男一女を生む長は龍太郎工學博士たり次は虎次郎大藏省主計官となり先生に先たつこと年餘にして歿す三男は喜三郎夭折す女は廣子戶田銳之助に適く先生人と爲り端正溫厚にして寡默其容溫乎其言藹然而かも其眼中異彩あり自ら人をして敬を致し狎るゝ能はさらしむ其人を敎ふる諄々として倦むことなし弟子に過あるも勵聲疾語せす而して能く自ら省みて悛めしむ先生親に仕へて至孝誠敬太だ篤し少時父を喪ひ家道裕ならず母加納氏賢にして淑大に炊織に努め梳嗽を忘るゝに至る是を以て家の經理井然として整ひ復先生をして後顧の憂なからしめ四方の志を成

すを得しむ斯母にして斯子ありと謂ふへし文久慶應の間世故多端事變測られず先生此際に出て藩序に私黌に千百の後進を陶冶誘掖す維新の變に際し我大垣藩をして多士濟々能く他藩の後に落ちず勤王の偉功を奏するを得しめたるもの先生與りて大に力あり先生學經史百家に渉り最左氏に深し若しそれ詩文筆札の如きは先生の視て末枝とする所なるへしと雖鄉黨の之を貴ふ趙璧も啻ならず而して文章に於て最其長を見る著す所左氏傳評釋藤陰詩文稿其他若干未だ梓に上らさるもの多しと云ふ

細逕如蛇隨澗轉。奔流似馬嚙崖鳴。危橋過去又崩棧。人援蔦蘿魚貫行。
誤脱彩衣着朝服。歸心夜夜夢慈顏。決然今日上程去。去向家鄉養老山。

四〇 工學博士　野村龍太郎

君は舊大垣藩儒野村煥の長男にして安政六年正月藩地に生る明治五年上京して慶應義塾東京外國語學校に歷學し八年開成學校に入り十四年東京大學理學部を卒業し直に東京府土木課に勤務し十九年鐵道局技師に轉任し爾來今日に至るまで二十有餘年鐵道の經營布設監督行政の庶務に鞅掌し斯界の改良進步に貢獻せる所のもの頗る多し今其主なる者を擧ぐれば東海道鐵道布設工事、甲武鐵道新宿八王子間工事、東京鐵道線路保線事業等を擔任し二十四年濃尾地方震災に際し同地方線路復舊工事、長良川橋梁改築工事を監督し二十五年全國鐵道線路調查委員を命せられ主として中央線路の調査を擔任し二十七年奧羽福島出張所長となり福島、米澤間の線路工事を竣成す抑此工事たるや彼の東海道線箱根山麓の隧道と共に天下の難工事と稱せられたる者にして君は技師として其衝に當り刻苦精勵備さに到り或は工夫に先んじて隧道に入り身汚塗に塗みれて作業し或は暗中誤て糞塊を握り微笑を以て之を迎え坑奥を究めされは趾を回さず其他工事期限の切迫するや啻に沐食を廢するのみならず徹夜數日に及び僅に橋架に凭て假睡を成せしことありと云ふ其職務に精勵忠實なる率ね此類なり二十九年歐米各國に派遣せられ鐵道事業を視察し三十一年歸朝し鐵道局設計並に營業課長として鐵道の監督に任ず三十二年

工學博士の學位を受け本職の外に東京市區改正委員、土木會議員、鐵道會員等の數職を兼任し今や鐵道院建設部長として名聲嘖々斯界の重鎭たり

聞く君垂髫の頃より謹格穎悟頭髮一絲を紊さず衣袴一褶を見ず端坐時を移すも容止變せず加ふるに學業大に秀で成童にして既に藩校の大試に及第す九歳のとき藩主の前に揮毫せしに其風采閑雅にして筆跡亦凡ならず藩主大に之を嗟稱せりと云ふ君の今日有る蓋し偶然に非らさるなり

四一　大塚榮吉

現時東京芝區豐岡町に最も盛大なる工塲を設け同區四國町に分工塲を有し工業界の覇者として東西の新紙に喧傳せられ一世に仰望せられつゝある大塚榮吉君は大垣俵町の人にして明治元年四月十五日を以て同地に生る

父は名を吉次郎と稱し八百屋を業とせり君幼時興文學校に學び又同町竹島の人某に就き和算を習ひしに成績常に群に秀で特に算術は最も好む所にして能く蘊奥を極めたりと云ふ後學問を廢し專ら家業を助けつゝありしに君の二十歳の頃種々なる蹉跌を生し家運頓に傾き遂に倒産の悲境に陷れり是に於て明治二十年八月深く心に決する所ありて故郷を辭して東京に出て工手學校に入り非常なる苦學をなし漸く業を卒へ不破郡宮代村松井兵次郎の經營に係る芝區鐵工所に入り其業を助くることゝなれり爾來君は衝天の意氣を胸裏に藏め正實に熱心に其業務に奮勵し寸隙を以て豫て習得せる學理を實地に應用研究して止ます後松井氏の業を廢するに及び君は自ら其業を繼承し主として鑛山用機械の改良製作に熱心し意匠慘憺經營刻苦着々歩を進め急がず休まず唯順路に依て漸進せしに天成の才能自ら現はれ畫策功を奏し事業は駸々として繁盛を來たし遂に今日の如き偉大なる成功を見るに至れり

君人と爲り豪宕豁達一事を擧ぐれば必ず其成功を期し艱難に遇へば益々勇往の念を加ふされば其工夫せる大塚式送風機大塚式淘汰盤、チルド鑄造車輪等は實に有益なる發明として特許を與へられたる物なり又勤儉己を持し惻隱の情深き世其儔

を見ること稀なり今唯其一例を擧げんに近時盛に行はるゝ避暑旅行の如きは君の未だ嘗て一回も試みさる所にして君は常に曰く炎熱隆暑と戰ふは余一人のみならず余の使役する幾百の職工は日々背に汗して工場に勞動す而して余獨恣に安逸を貪るに忍びんやと嗚呼君の成功は勿論英敏精緻なる腦力と加ふるに百折不撓の精神を以てせしに因ると雖亦此一掬の温情に基因せずんはあらさるなり

四二　大橋翠石

我國古來翎毛を描くの名工少しとせず近世に在りては應擧、岸駒を以て白眉となす而して現今虎を描くの妙應、岸二家を凌ぐの評ある人是を大橋翠石君となす君は大垣新町の人大橋龜三郎の次子にして慶應元年四月を以て生る通稱宇一郎翠石は其號なり性謹謙にして寡默幼より繪事を好み畫法を戸田葆堂に問ふ成童の後東京に之き渡邊小華の門に入り六法の傳授を受け主として南宗の蘭竹を描き又花卉の寫生に從事す後其思想を轉して力を動物の研究に致す就中虎に就て寫生の功を積むこと數年にして其間經營慘憺餘力を遺さず其跡頗る應擧の寫生に心血を注ぎたるに似たるものあり遂に大に發明する所ありて一種の描法を案出し墨痕淋漓氣色生動し將さに風雨を起さんとする猛虎筆下に躍如し觀る者感嘆せさるなし第四回內國勸業博覽會、全國青年繪畫展覽會等に出品して內外人の賞讃を博すること前後數回明治三十年巴里萬國大博覽會開設に際し君の畫けるものにして子爵金子堅太郎氏の所藏に係る猛虎圖及び君の知友京都美術學校敎授森鳳聲氏所藏の者とを出品し大に碧眼を驚かし賞讃の辭會の內外に溢れ名聲隆々として揚り遂に最も名譽ある金牌を贈與せられたり是より虎の圖を請ふもの陸續として絶えず絹素堆を成し縱令ひ日夜筆を休めさるも殆と希望者の需を償ふに足らず三十四年四月宮內省御用品として其揮毫を命ぜられたり以て其技の如何に卓越するかを知るに足る而して今猶其描法に就て專心研究する所あるは最も感嘆すべきことにして常人の企及す可からさる所なり

四三　海軍少尉　黑川永次

君は大垣町字馬場の人大垣中學校第五年級在學中海軍兵學校の試驗に應し一擧にして及第し江田島に在りて勉學すること三歲明治三十五年優等を以て海軍兵學校を卒業し實地練習の爲遠洋航海の途に就けり當時の練習艦は嚴島橋立松島の三艦にして君は嚴島乘組を命せらる茲に三艦は三十六年二月上村中將に引率され香港南洋諸島を經て濠洲に赴き碇泊數週日にして歸航せり此航や狂瀾怒濤の中に在りて炎暑を凌き風雨と鬪ひ以て技術を練り心膽を鍛ひ君の修養をして益深からしめたり既にして海軍少尉候補生に任せられ一等巡洋艦淺間乘組を命せられたり聞く君は兵學校在學中より各科皆成績佳良なりしが就中運用術に長し且部下を統御するに巧にして已に人に長たるの風格ありきと三十七年二月日露の國交斷絕し旅順及ひ仁川の海戰始まりぬ君の乘れる所の淺間艦は仁川の海戰に參加し敵の堅艦ワリヤーク及ひコレーツの二隻を擊沈し偉功を奏したり君此の時已に少尉に進みて

甲板上の任務を帶び努力奮戰したり後旅順の本艦隊に合し或は港口閉塞隊收容の任に當り或は旅順口砲擊の壯擧を試み又特別命令によりて常磐吉野笠置等の諸艦と與に日本海に出動し浦塩の軍港を砲擊したり時に朔風怒號し烈寒肌を裂き舷を打つ驚浪は直ちに氷結して艦身銀に化し海面には氷山絕えず流れ來り艦腹を衝かんとし險難言ふへからす既にして任務を了し再ひ旅順艦隊に合したり是より先き旅順の敵艦は我軍の爲に摧殘せられ港內に蟄伏し機も有らは脫出せんとせしを以て我軍は益封鎖監視を嚴密にせり君時に航海士の職に榮進し其責任益重大となり夜間と雖僅に少時の睡眠をなし得さること多かりき九月十五日我軍は軍略上旅順口偵察の必要を生し有爲の士官をして强行偵察を行はしむ君選はれて此の大任を荷ふに至りぬ是に於て君思へらく我が大に爲すこと有るは正に此時なりと部下十數名と艦載水雷艇に駕し晨を侵して踴躍出發す敵の砲臺は疾く之を覺り砲を攢めて急射し彈丸雨注し砲火電馳し凄絕慘絕此際但奪ふへからさるものは勇猛なる精神なり君益奮つて直前せんとし忽ち敵の機械水雷に觸れて艇身爆裂し君と共に狂

瀾の中に捲去り遂に名譽の戰死をなしたり時に年二十三君人と爲り沈毅にして温厚躰軀强健にして肥滿し實に好個の海軍士官たり而して他日將官たるべき奇才を有し早く殉國の士となる惜しい哉

四四　矢橋亮吉

世に同情すべきもの多々ありと雖俊秀有爲の青年にして學資を得さる爲に空く窮途に泣かしむるより憐むべきはあらさるなり若し富豪の身を以てせは僅に一擧手一投足の勞に過ぎず而かも之を顧みるもの稀なるは豈嘆ずべきにあらずや矢橋亮吉君の如き身素封の家に生ると雖篤實の志深く特に此等青年に對しては最同情を寄せ成績優等の貧生を助け高等の學校に進ましめ其素志を遂行せしめたるもの甚多し寔に篤行の紳士と謂ふへし或人一貧生を伴ひ君の宅を訪ひ其扶助を請ひしとき君語つて曰く余は父祖より分配せられたる財産なきに非らす然れとも是れ余の守るべきものにして決して他事に費消すべからず余は職を銀行に奉し其等所得の月俸を節約し此を以て扶助の資に充てんとするなり然らされは父祖の財に依りて余の美名を買ふに異らす是れ余の潔とせさる所而して資を受くる者も亦能く微旨の在る所を知らは奮發の念一層に深かるべしと嗚呼君の心を用ふること深く且遠い哉

君慶應三年九月六日を以て不破郡赤坂町に生る父を宗太郎と曰ふ君其三男にして明治二十六年十一月分れて一家を立つ是より先き東京高等商業學校を卒業し三十一年四月濃飛農工銀行の創設せらるゝや選ばれて支配人となり且赤阪銀行取締役を兼務す

君又卓識あり施設する所少からず邸内に工塲を設け蒸氣機關を利用し赤阪山特産の大理石を以て建築用品並に裝飾用品を製造し盛に斯業の發達進歩を圖れり君の嗜好する所のものは別に記すべきなし唯夏冬の學期休暇毎に學生の歸り來りて君の邸を訪ふものゝ健全なる容姿と進殖せる成績を見るを以て無限の快樂となせるのみ

四五　梁川星巖

先生名は孟緯字は公圖又無象初め名を卯字を伯兎と稱す通稱新十郎星巖は其號なり安八郡曾根村の人寛政元年己酉の歳六月十日に生る父を稻津孫曾長高と曰ふ家世々富豪にして鄕士たり大垣藩主より名字帶刀を許され藩の藏本役となり五人扶知を賜ふ母は森氏夙に貞淑の聞えあり二子を擧ぐ長は即ち先生にして次は仲建なり家庭極めて嚴肅なりしと云ふ

先生幼にして沈毅頴悟七歳のとき同村華溪寺大隨和尚に就て章句を受け習字を學びしに他の兒童と異り漫に嬉戲せず嶄然頭角を見はしたり其家庭に在るや父長高時々忠臣義士の談話をなしければ先生欣然として傾聽し能く其大體を記臆し夜深に至ることあるも少しも倦厭することなく再三反覆して之を父に質せり父甚だ之を愛し行々江戸に遊學せしめんと欲したりしに寛政十二年正月先生十二歳のとき偶病に罹りて歿し其四月母亦歿し先生悲哀慟哭殆と寢食を廢す文化元年十六歳のとき慨然志を立てゝ曰く苟も男子に生れ豈碌々として鄕里に老ひんやと乃ち祖先傳承の富を擧けて弟仲建に讓り笈を負ふて江戸に至る是れ亡父の遺志に酬ひん爲なり江戸に於て古賀精里、山本北山等を師とし經史を講究し傍ら詩文を研鑽す先生少年の身を以て吟壇才子の間に周旋し往々人を驚かすの句を吐き菊池五山、大窪詩佛の如き詩界の大家も其才を愛し後生畏るべしと稱したり居ること數年にして鄕里に歸り文化七年二十二歳のとき再び江戸に赴き留學すること亦數年事志と違ひ落魄薄倖望鄕の念に堪へず屢詩を賦し弟に寄す十一年江戸を出て東武、總野の間に薄遊し十二年七月上野より信濃を歷遊し碓氷嶺を踰え淺間山を望み河中島の古戰場を吊ひ十三年駿河より遠江に入り江山明媚の間に吟哦淹留し十四年秋九月鄕里に歸り梨花村舍に閑居し專ら詩學を攻め傍ら村の少年を聚めて句讀を授く張氏紅蘭女史時に年十四亦來りて詩法を受く女史先生の才を慕ひ箕箒を奉せんことを父母に乞ふ父母も亦先生の人と爲りを知り之を許す女史は同村稻津長好の長女にして母は川瀨氏先生と姻戚たり文政三年十七歳にして先生村舍に

284608

在ること前後數年村夫子を以て自ら任じ時々京畿、勢、尾の間に遊び文人隱士を訪ひ唱和卷を成す嘗て賴山陽を京都鴨涯に訪ひ意氣投合し斷金の盟を訂せり文政五年九月重陽の日女史を携へ西遊の途に上り勢伊の間に吟詠し六年二月梅花を月ケ瀨に觀和州に入りて古都の荒廢を慨し浪華を經て須磨、明石の風光を賞し備後に抵り菅茶山を訪ふ是より船に乘して廣島に赴き賴杏坪を訪ひ此に淹留歲を踰ゆ三原の梅花を賞す此間杏坪等と往來觴詠殆と虛日なかりき彼の有名なる常磐抱孤圖及び絲崎絕句は此頃に成れるものなり七年五月廣島を發し鎭西に航す壇浦に壽永の古を吊ひ肥筑の間に烟霞の痼を養ひ長崎に至りては淸客江芸閣と詩酒の歡を盡す又瓊浦雜詠三十首は山陽の長崎謠と併誦するに足る長崎より諫早、竹崎、諸富を經て筑後川を渡り菊池氏の壯烈を感吟し久留米を經て耶馬溪に遊び十月下關に至りて茲に歲を送り八年正月十三日下關を發し復廣島に赴き杏坪に歡待せられ淹留半歲を過き更に三原を經て玉浦に寓す時に山陽の京都より父春水の喪に走るに會す乃ち相晤して京都に再會せんことを約せり十一月二日尾の道を發し途次再び菅茶山を訪ひ海を航して讃岐に抵り高松、丸龜を過きて再び備中に還り茲に春を迎へ播州を經て浪華に至る九年三月初旬澱江を泝りて京都に入り山陽と相携へて花を嵐山に觀る先生の山陽に於ける交情最深く肺肝を披瀝して歡然相得るに及ては必ず談國事に及び王室の式微を慨し幕府の專橫を憤れり夏四月京都を發し湖上の風景を賞詠し客遊五年にして曾根村の草堂に歸る而して在鄕僅に一歲にして復京都に上り銅駝坊に寓す是れ文政十年三月のことにして先生三十九歲の時なり居ること三年山陽と詩酒來往平生の歡を盡くす日野大納言資愛公先生の才を愛し顧謁最熟せり文政十二年四月鄕里に還り秋七月祖先祭を行ふ天保元年二月上洛し鴨東に寓す秋九月將さに江戶に遊ばんとして途に上るや山陽の病を聞き彥根より京都に急行して之を訪ひ遂に東下の途に就けり途中其訃を聞き慟哭詩を賦して之を吊す江戶に抵り先輩卷致遠の宅に寓し三年十二月宅を八丁堀に賃せ四年秋藤田東湖の觀月宴に赴き唱和訂盟せり五年正月詩を賦し幕府の專橫を憤る二月江戶大火あり先生の寓居亦災に罹る東湖の好意に依り暫く水戶藩邸に假寓す時に華頂法

親王駕を駐めて東叡山に在り先生及詩佛其知遇を蒙り屢謁を賜ひ詩賦を命せらる十一月神田阿玉池の傍に新居を營み問詩の弟子益々進む爾來十年間江戸に在りて門戸を張り玉池吟社の名天下に鳴る常に天下の名士と來往し暇あらは則ち常、野、總、房の間に遊び品題殆と遍し弘化二年四月俄に玉池吟社を閉ち西歸の計を決す人其故を問へとも答へず當時の門下の詩人として有名なるは大沼枕山、小野湖山、鱸松塘、遠山雲如、森春濤の諸氏とす佐久間象山も亦社に參して弟子の禮を執れり先生既に歸鄉して茲に歲を送り三年六月尾、濃、勢、紀の間を歷遊して故舊を訪問し歲晚京都に入り鴨川に臨みて宅を賃し居ること二年嘉永元年十二月居を華頂山の北に移し黃葉山房と名づく當時海外の諸國來りて互市を請ふこと頻にして人心洶々物議騷然たり先生憂國の念禁じ難く陰かに天下の名士と結托し暮夜掌を示して時勢を談し大に爲す所あらんとす然れども陽には是れ純然たる老詩人たり二年九月又鴨涯に移り鴨沂小隱と稱し安政五年戊午終焉の時に至るまて凡十一年間此に栖息せり其間香を焚き書を讀み花に哦し月に嘯き優游自適世事の何物たるを知らざるが如しと雖忠憤慷慨の情抑止し難きものあり勤王諸士の京に上りて諸搢紳に見えんと欲する者必す先生の紹介を乞へりと云ふ其國事を慨して作れる所の詩集りて編を成す之を顧天集と名づく而して生前には深く篋底に秘し敢て他人に示さゞりき唯安政五年の秋老中間部詮勝幕命を帶びて闕に朝せしとき時弊を譏れるもの二十五篇を錄示せしのみ是れ大に幕吏の注目する所となり勤王諸士の大獄起らんとするとき先生を以て領袖に擬し偵察頗る嚴なりき然るに此歲九月二日疫病に罹り暴かに歿し遂に捕吏の累に遇はす歿後三日梅田雲濱、賴三樹等盡く捕はらて江戸に押送せられたり紅蘭女史の拘せられて訊問を受くるや毅然として曰く妾が夫國事に就て謀議する所あるも豈婦人小子に機密を漏すものならんや妾敢て知らず諸公は國家の事を以て妻妾と相語るかと幕吏答ふる所を知らず遂に之を宥せり先生晚年に道學の書を讀み兼て佛典に通ず其最も喜びし所は王陽明、劉念臺の著書なりき明治元年　今上陛下登極あらせ給ふや首として維新前の功臣を祭らせ給ふ同年十二月を以て梁川家に賜はりたる辭令あり左に記す

右舊幕府執政の頃より勤王の志厚く鞠躬盡力の內病死致候方今王政復古之時節至り候に付生前の刻苦忠勤を追慕し十五日於靈山靈魂を祭祀する者也

と明治二十四年四月八日を以て正四位を贈られ靖國神社に合祀せられたり先生は晩年大垣藩老小原鐵心と交誼尤も厚く來往少からず維新前國家多難の際鐵心に寄せたる書柬の如き最も先生忠誠の心事を窺ふに足るものあり

浪士　故梁川星巖

門人小野湖山は九十七歲の高齡を以て尙健在し此頃先生の性行の三變せしことを人に語れり曰く先生は天性剛毅にして信ずる所は必ず遂行せざれば止まず一旦更に善きものありと認むるときは果然として之に遷り實に豹變の美あり故に壯年より晩年までに凡そ三變し每變數等を高ふせり初年江戶に出て山本北山の門に入り修學すること前後凡十年の後舊里に還り杜門苦學すること數年遂に西遊を試み大に茶山、杏坪、山陽諸先輩の推賞を得儼然たる一家をなすに至る是れ其第一變なり其後再び江戶に上り玉池吟社を開き盛に詩學を唱導して都下の詩壇を風靡し後感する所ありて急に西歸し遂に京師に出で永住の計をなし閑に乘して佛典を講究し進んで王陽明の學を研鑽し深く劉念臺を信し復詩人を以て自ら任せず是れ其第二變にして詩境の進みて道德の學に入りしもの彼の春雷餘響は此時に成りしなり其後知行合一の學益進み會々時局の丕變に察する所あり直に之を事功の上に施さんと欲し力を極めて尊攘の大義を主張し竊に賴三樹、梅田雲濱等と謀り天下の志士を糾合せんとし余輩も亦大に其議に與かりたり其議の純正なる其志の堅確なる佐久間象山、西鄉隆盛等の諸名士を感服せしむるに至れり是れ其第三變にして所學の殆ど實行に進みたるものなり之を要するに古來少年より老境に至るまで志行問學の變化せし人は多しと雖先生の如く每變數等を高めし人は其例多からずとす是れ能く先生の性行を悉くせるものと謂ふべし

一道奔流劈地開。灘聲捲雨鬪風雷。甕予無翼共飛狎。兩度天龍河上來。
詩酒還成半日遊。此生隨處送悠悠。他年夢裏問陳迹。細雨春帆雙鷺洲。
文章不値半文錢。才到曹劉也等閑。收拾聲名便歸去。一簪白髮舊靑山。

當年乃祖氣憑凌。叱咤風雲卷地輿。今日不能除外釁。征夷二字是虛稱。

駑劣無能年已高。眼看鯨鼠鼓風濤。生辰不受諸朋賀。爲憶大君宵旰勞。

悔哉早歲盜虛聲。皓首終無一事成。可羨諸君皆駿足。百千萬里是前程。

四六　梁川紅蘭

紅蘭女史は安八郡曾根村の人稻津長好の長女にして母は川瀨氏文政三年春三月女史年十七にして梁川星巖に嫁せり居ること未だ數旬ならざるに星巖女史を顧みて曰く吾暫く近國に漫遊せん其間手藝に從ふ傍ら勉めて學問を修め先づ三體詩を諳記すべしとて絕句の部を授け飄然として家を出でたり女史は家事の暇を以て日夜絕句を諳誦し三十日の後には之を背誦するを得るに至れり然れども星巖尙歸らず音信杳として尋ぬるに由なし因て更に進みて律詩の部に及び反覆吟誦し遂に三體詩全部を通じて盡く諳誦するを得たり而して良人よりは依然として消息なく花晨月夕に遇ふ每に轉々反側の情に堪へず偏に其身の無事ならんことを祈れり斯くて三年を經し秋星巖突然家に歸り來り女史に向ひ絕句の諳記如何を問ひしに一句を誤らず全部を通誦せしかば星巖大に之を賞したり女史是より益々書を讀み詩歌を學びて怠らざりければ良人と共に四方を歷遊し名山勝區の間に吟詠し名聲大に揚がれり女史は啻に學才に秀絕するのみならず裁縫の事より家政の道に至るまで精通せざるなし嘗て畫法を中林竹洞に學び山水花卉を善くすれども文人墨客を以て自ら居らず故に必ず鍼線餘事と刻める印を用ゐたり星巖は勤王家なれば國事に關する書類甚多し女史は豫め幕府の意を知り良人に謀りて之を烟となしぬ後果して幕吏來り家宅の搜索をなせしかど如何なる證跡をも得る能はざりき用意斯の如き婦人にして始めて能く良人を輔佐するを得べきなり星巖は極めて清貧に甘ぜし人にして晚年國家多事の際の如きは窮乏特に甚しく一日西鄉南洲の來訪せしとき歡待するに物なく女史は頭上銀釵を拔き竊に之を典して錢に替へ纔かに國士を饗應したりと云ふ其能く良人の心事を察し機宜の處置を取りしが如きも亦女史に非らされは能はざる所なり女史は又琴枝に熟達し之を詩歌に和して彈するに飛塵停雲

の妙ありて自から良人の心を慰め常に和氣靄然たり女史操りし所の琴は七絃琴にして鐵如意、明星巖と併せて梁家の秘藏品たり

安政五年九月三日星巖は尊王の大志を抱きながら急病の爲に歿せり此時に當り幕府は大に憂國の志士を捕ふ幕吏は星巖を以て其領袖となし大に注目せしかは歿後捕吏來りて女史を捕へ去り尊攘論者の事情を探知せんと欲し之を鞠問せしに女史答へて曰く吾が夫は豈輕しく機密を人に洩すが如き者ならんや余敢て知らず若し此事ありとするも夫の秘密を告ぐるは婦道にあらずとて何事も言はさりけれは獄吏も如何ともする能はずして止みぬ女史は今や獄中の人となれり獄吏も之を憐みて獄中數羽の鳩を飼ひて無聊を慰むることを許しぬ女史は更に紙墨を得んことを望みけれども許されず唯筆と板とを與へられければ晝は淡水を以て板面に書畫を描き夜は詩歌を作りて愁を消しぬ獄窓に在ること殆と半年に亘り翌年二月十六日赦されて青天白日の身となれり明治元年正月朝廷女史が夫星巖の勤王を補佐せし功を賞し左の辭令を賜ふ

故梁川星巖妻　景婉

故星巖儀舊幕府執政の頃より勤王の志厚く畢生力を王事に盡し候處景婉事承順補佐し夫病死の後に至り德川氏役方の者のために捕へられ數月投獄嚴酷の鞠責に逢ふといへとも節操聊撓む事なく艱難を凌き終に方今　王政復古の時を待得貞操節烈可賞事に候依之星巖存生中の忠志旁へ對し扶持米貳人分遣之
候事

此一事以て女史の如何に節操の高かりしを知るに足るべし明治十二年三月病歿す年七十六

貧姑也抵富家娘。壓髩梳笄璹瑁光。不見古時風俗美。內人首飾尙黃楊。
閨窓人靜夜風淸。春到海棠殊有情。一笑貧居出無燭。倩他明月照庭行。

四七　孝子柳ヶ瀬辨吉

君は慶應三年十一月を以て安八郡南平野村字西ノ保に生る父を安藤紋七と曰ふ明

治二十二年不破郡荒崎村字綾戸柳ケ瀬作善の嗣子となる翌年妻ワイを安八郡南杭瀬村字割田より迎ふ是より先養父作善は中風症に罹り終に全身不隨となりて常に病床に在り君の温厚順篤なる能く養母を輔け妻と力を恊せ日夜慰籍孝養を怠らす妻も亦温順にして能く孝貞を盡し以て其輕快を祈りたり而るに三十三年春の頃より養母亦不治の難症に罹りて蓐に在り且夫妻の間に十一歳以下の子女五人ありて頗る悲哀煩勞を極めたりと雖衷心孝を竭し病父母の滿足なる色を見るを以て無上の樂となし益々勇を皷して朝夕の看護を加へたりしも養母は翌三十四年五月を以て不歸の客となれり孝子夫妻は大に落膽悲傷し是より全力を注きて養父の看護に努む然れとも病勢は益々加はり便通一晝夜に數十回に及べり君は之を他人に委するを欲せす自ら之に當り若し晝夜の看護に疲れて眠を催すときは紐を指或は腕に結ひ其一端を病人の枕邊に至らしめて假睡し用ある毎に病人より曳かれて眼を覺すを常とせり斯の如く周密なる用意を以て看護に當りしこと十有餘年の久しき一日の如し病父其孝養の厚きを感喜し訪問の人ある毎に涙を浮べて之を語れり三十六年十月遂に簀を易ふ實に發病後十有七年なりと云ふ時の知事川路利恭氏夫妻の孝德を旌表し各木盃一個を下賜したり今や君一村の人に畏敬せられ君子人を以て稱せらるゝに至れり

四八　安田道雄

夙に師範學校を卒業し村夫子を以て自任し親切懇到に兒童を敎育し後學務委員となりて敎育の普及を圖り餘暇を以て諷詠自ら樂む者之を安田道雄君と爲す

君は安八郡福束村字塲喰の人幼名を道三郎と曰ひ豊洲と號す父を善左衞門と曰ひ東野と號す漢學者にして村塾を開き多くの子弟を敎育せり君は則ち其長男にして安政二年二月十五日を以て生る性質温厚淳朴にして夙に家庭に於て家學を受け青年の頃大垣藩儒野村藤陰翁に就きて漢籍を修め傍ら詩文を研究し大に自得する所あり詞才煥發事に觸れ時に感し詩篇巻を成し佳什の觀るへきもの少からず明治八年大垣師範學校に入り卒業の後塲喰小學校の首席訓導となり能く敎育の任を盡く

し後學務委員となり功勞尠からざりしかば明治十六年十二月一日を以て文部省より玉篇壹部硯箱壹個を賞賜せり

君同志者と謀り切思吟社を創設し毎月朔望二回同人相會し吟詠諷誦以て思を述べ志を養へり而して此等の詩稿は一々淨寫し京都の老儒谷鐵臣翁の品隲を乞ひたりと云ふ

君天性至孝にして父の忌辰四月十二日を以て親戚知己を招き遺愛の櫻樹の下に法筵を開き詩文を供へ其靈を慰めたり

君初め渡邊氏を娶り一男を擧け不幸にして早く妻を喪ひ後福田氏を娶り又一男を擧く然れとも未だ團欒の寶を擧くるに至らず災厄荐に臻り明治二十三年九月九日弟謙作を喪ひ十七日母を喪ひ十月二日祖母を喪ひ尋て病魔は君の身を襲ひ藥石功なく同月十二日遂に歿せり享年三十六師藤陰翁訃を聞き深く哀惜し詩を賦して之を吊す末句に云く知音賴有故人在、校訂遺編詩万章と蓋君の吟友中島藘舟氏豊洲遺稿を刊し故舊に頒たんとするの厚意を詠せるなり

四九　理學博士　松井直吉

博士は和田爲助の三男にして安政四年某月大垣東長町に生れ出て、松井氏の嗣子と爲る博士幼にして穎悟習字を栗田某に學び七歳にして致道館に入る館は藩の學問所にして今の興文小學校の前身たり當時博士最年少而かも才學は全校を壓せり明治三年政府大學南校を開き諸藩の秀才を徵して學に就かしむ所謂貢進生是なり彼の地震關谷と稱せられし故關谷清景氏と俊秀の聞え高かりし故錦見貫一郞氏其選に當れり後錦見氏故ありて之を辭し博士代りて入學し精勵無比儕輩歎異せさるなし明治五年岩倉家の家扶（大垣藩士）松井喜太郞氏に識られ其嗣子となり松井姓を冒せり明治八年學半ばにして米國留學を命せられ北米合衆國コロンビヤ鑛山大學に入る博士の同大學に在るや亦篤學を以て稱せられ晝夜手に卷を釋かす碧眼の學友を驚かしたりと云ふ卒業の後更に學ぶこと一年ドクトル、オブ、フィロソフィー（理學博士）の最高學位を受く明治十三年學就り歐洲を經て歸朝し直に東京大學理

學部の教授に任せられ化學を擔當せり明治十九年大阪大學新設の議あり先つ其豫備門を設立し翌廿年今の第三高等學校長折田彦市氏之が長となり博士其教頭となり任に大阪に赴く明治廿三年駒場農林大學の帝國大學に合併せられ農科大學を設けられし際校内の教官黨を樹て互に鬩爭する所ありしも博士之が長となり拮据經營難を排し紛を解き期年ならずして治績擧かり整然として緒に就く爾來屢他官を兼ぬと雖學長たること舊の如し明治三十年文部省實業學務局長に任し施設せし所甚多し明治三十一年轉じて高等學務局長を兼任し同年秋憲政黨内閣の成るに及び辭して農科大學長に專任す明治三十三年命を以て歐米諸國に遊び實業敎育を視察す明治三十五年再び專門學務局長に任し農科大學長を兼任し明治三十八年に本官を辭し再び農科大學長に專任す

博士幼にして書を善くす然れとも洋行後は舊の如くならず幼時又鐵筆の技を好み書道の師田邊風外翁の爲めに其落欵印を刻したることあり其他武者繪を好み他の兒童の遊戯することも其伍に入らず紙を母君に乞ひ繪を習ふを以て娛樂となしたり

明治廿年前後より友人米人フエノロサ及ひ岡倉覺三の諸氏と往來して日本美術を研究し其道に通するに至りしは遠く淵源する所ありと謂ふべし去秋文部省に美術展覽會の擧ありしとき博士其審査委員の一人に推さる亦以て君の美術鑑識の力尋常に非らさるを知るに足る而して專門學なる化學の外に諸種の科學に通曉する博士の如き蓋し匹罕なり特に英語學に深く又英文學に造詣する所あり記憶力の强きこと異常にして常に受業の諸生をして驚異せしむ

博士は天性樂天家にして一事の爲めに甚しく心を痛むることなし其家に在るや善諧美談和氣堂に滿ち偶困難に際することあるも絕えて憂色を見はさず然れとも博士の過去は平々坦々たるものにして極めて幸福なる人なり博士公退燕居の際音曲落語講釋を聽くを好み又自から謠曲に長ず聲量大ならずと雖天禀の特長を發揮して精妙を極め紆餘曲折法に入らざるなし初め木下廣次博士等と與に梅若實に學び後觀世清之を師とす

博士は經濟に長すれとも家には餘財少し是れ公共の事業に投する所多ければなり

常に郷黨後進の誘掖に努め養成社青年會等の爲め力を效すこと少からず今現に社の理事會の長として盡碎す平素酒を飮まず烟草を好まず又少時より如何なる粗服を纒ふも意となさず身榮職に至るも渝ることなし而して華美を好まさるは天性に出づ其他美德の掬すべきもの少からず

博士の配松井氏きい子は兒女十餘人を擧け子寶博士の名あり長男元太郎氏は工學士にして應用化學を修め大阪に在り次男文次郎氏又工學士にして機械工學を修め今一年志願兵たり三男秀三郎氏は今農科大學に在り長女ゆき子は理學士木村惠吉氏に嫁す其餘一男の他姓を冐し一女の夭したる外皆家に在り其家庭の和平にして春海の如きは世間罕に觀る所にして博士及夫人の薫化想ふべきなり夫人は學習院女子部に學び人と爲り洒脫にして愛敬すへし多數の兒女を膝下に鞠育し蘭玉階に滿つ洵に博士の好逑たるに背かず

五〇　松永用助

君文化十四年十月十五日揖斐郡谷汲村字深阪の一農家に生る幼にして父を喪ひ爾來母と索居せしも家政の調理宜しきを得既に老成人も及ばざりしものありしと云

君謂らく農は國家の大本而して人或は之を賤み輕んず余の取らさる所なり余は寧ろ之に依て家を興さんと勤倹力行を以て旨とし日夜刻苦勉勵し大に農事に努め些少にても餘財あらは荒蕪せる田圃山林を購ひて之を開墾改良し山林の如きは年々多數の杉苗を移植し今は其數幾萬なるを知らず而して其大なるものは幹圍六七尺に及び鬱蒼たる良林を成し田圃の如きは歳々改善を加へ來り今は肥沃なる美田と化し遂に巨萬の富を累ぬるに至りぬ君嘉永三年村の名主役を命せられしより以來勤續十數年村治に貢獻する所尠からず村民を見ること恰も家族の如く不幸窮境に陷り救濟を乞ふ者あらば必ず適當の事業を與へて生計の道を得せしむ今其治績の一斑を左に記す

谷汲村は三面山を以て圍まれ僅に南の一面を開くのみ故に一朝大雨に遭へは大洞深阪の二區は宛も湖水の狀をなし而して又晴天十數日に亘れは灌漑の便なきを以

て忽ち旱魃す是を以て區内數十町の田面は年々水旱の憂を免れす君之を患ひ山林に樹を增植して水源を涵養し樋管を改良して排水を善くせんと欲せしが二三地主の異議起り容易に解決せす君奔走盡力して遂に實行するを得大に被害を減したり安政七年の凶歳に饑餓に瀕せしもの陸續道に滿ち最も慘狀を極めしが君の居村は此の前年より一村共同し山林數町を開墾し大に里芋を栽培し非常の豊作を得每戸數俵を分藏せしを以て凶厄を免れ而して芋の莖葉等は隣村の者に頒ち爲に饑を凌きし者少からさりしと云ふ谷汲村より揖斐町に出つるに小野阪の難所ありて行人常に艱めり君開鑿工事を發企し明治十五年二月を以て起工し其目的の幾分を成就したり功を以て縣知事より大木盃壹個を賞賜せらる其他耕地の整理山林の增植等一々擧くるに遑あらす

君人と爲り朴直强健にして八十餘年間醫藥を知らす唯終焉の前々日家人の勸に因て始めて服藥せしのみ明治三十一年十月二十八日享年八十四にして歿す聞く君每朝必す家人に先ちて早起し每食必す三椀を以て限となし日常粗服を着け草鞋を穿ち山野の間に活動し老年に至るも改めす家人屢々安樂に餘生を送らんことを勸むるも肯ぜすして曰く余幼にして父を喪ひ多大の辛酸を嘗め以て今日の財產を成せり今や悠々餘生を樂むは敢て不可なしと雖唯家人鄕黨の見て以て知らす識らす奢侈安逸に習はんことを恐るゝのみと洵に是れ有德の言と謂ふべし又平素家人を戒むるの金言あり曰く用は常に多からんことを要す用少けれは身體を害す曰く投機の事業は全然排斥し堅く之を戒む凡そ事は成功を急く可らす急ぐが故に破る曰く一時に纏りたる資本を出して零碎の利を集むるは大に智力を要す故に零碎の資本を長時間に出して纏りたる利を收むるを要すと

五一　工學博士　松本莊一郎

君幼名を泰藏と稱す嘉永元年五月播州神崎郡粟賀村に生る明治の初箕作麟祥翁の塾に入り山田冬藏、高並大助（大井憲太郎）と共に箕作塾の三秀才と稱せらる人皆曰く松本氏是より興らんと然れども家道窮迫學資給せさるの故を以て辭して將さ

に郷里に歸らんとす塾中に上田肇（後に花の本聽秋と稱し俳諧の宗匠となる）と云へる者あり大垣の藩士なり俊才彼れの如くにして中道にして廢するを惜み大垣藩に推擧し藩士となして大學南校に入らしむ明治三年八月米國留學を命せられ居ること七年專ら工學を修め歸るに及て東京府御用掛となり土木事務を擔任し水道改正掛長、道路改修委員となる既にして又東京大學工學科敎授を囑托せられ第一回內國勸業博覽會審査官となる明治十二年八月北海道開拓使廳御用掛となり炭鑛開掘、鐵道敷設、道路改正、市街整頓、石狩川口改築等の事業に從ひ開拓使廳土木に關する事業は一として君の經營に因らさるなし是を以て開拓使廳廢せられて後も尙工部權大技長又は農務權大技長の名を以て北海道に滯在し炭鑛鐵道其他官設の事業に鞅掌したり既にし政府大に力を鐵道に致し全國に普設するの計畫を立つるや十七年六月東京に歸り工部大技長、鐵道一等技師、鐵道廳部長を經て工學博士となり廿六年鐵道廳長官に任せらる是より先き井上某久しく長官の地位に在りしも鐵道上の經營施設は皆悉く君の手に成りしと云ふ三十年海外諸國の鐵道を視察せんとして艦を橫濱に解きしも途中病を發して布哇に上陸し遂に志を果さすして歸航せしも三十三年六月佛國巴里府に於ける萬國鐵道會議に參列し日本委員として大に聲譽を博したり其後臺灣鐵道顧問となり韓國京仁鐵道商議員となり到る所功績有り其病革るや朝廷多年の功を賞し正三位に敍し勳一等瑞寶章を授けらる歿する年五十六君人と爲り恬澹快濶人に交るに城府を設けす常に儉薄自ら奉し曾て貨殖の念なし其簀を易ふるの際親近を枕頭に招き諄々乎として勞動の神聖にして卑むべきに非らさるを說きたりと云ふ顧ふに我邦鐵道創始の時に方て此適材を適所に用ひ以て其事業を大成するを得たりしは眞に邦家の幸慶なりと謂ふべし

五二　孝子前田萬作

萬作は安八郡大藪町の人明治十四年十一月十八日を以て生る幼にして父を喪ひ十二歳の時繼父某一子を伴ひて贅す萬作は至誠を以て繼父と實母とに事へ友情を以て義弟を愛し一家能く和順せり後繼父故ありて去りしが母は幾くもなくして中風

症に罹り半身不隨こなり起臥更衣より厠事に至るまで人の扶を假らさる可らす一人の姉ありこ雖放恣にして之を顧みす母側に在るを嫌ひて他方に往けり萬作は專ら看護に任せんこ欲するも家素より赤貧洗ふが如く糊口の途なきを以て同地釀酒家渡邊吾作に乞ひて使役せられ其賃錢に依て僅に生計を立つ而して夜は必す歸宅して母を看護し且便器の掃除衣服の洗濯等自ら之に當りて少しも懈らす每朝早起して薪水の勞を取り母の爲に一日の食事を整へ以て主家に赴く歸途には必す飮食店にて一菜を買めて母に供するを例こせり若し主家より歸り得さるこき店員に乞ひて之を母に輸さしむ店員之を輸す每に母は合掌して萬作の孝心を喜びたり萬作は母の獨居寂莫に堪へさるを思ひ晝間寸暇を得るここあらは輙ち母を省視して之を慰め主家に於て甘旨を受くるここあらは其一半は必す持し歸りて母に供ふ斯くの如きここ十年の久しきに及び主人大に其孝を賞し其住家の矮陋なるを以て新に之を改築して之を與ふ母の病革まるや萬作寸時も側を離れす晝夜心力を盡くして介抱し其回復を祈りしも遂に其功なく明治四十年九月某日を以て歿せり萬作悲哀慟哭し漸く葬儀を了し主家に仕ふるここ故の如くなりしも翌四十一年一月亦遂に逝けり主人深く之を感動して厚く葬儀を理し且墓石を建て題して孝子萬作墓こ曰へり鄕人亦皆其至孝に感せさるはなかりき

五三　兒玉良三

君嘉永四年某月を以て安八郡北平野村字丈六道に生る幼名を吉二郎こ稱す稍長して宇右衛門こ改め後更に良三こ改む家素こ貧困にして幼時人に雇はれ草刈を事こす然れごも氣宇高遠意志剛健十二歲のこき一日決然鎌を投して大垣に出て士族某家に仕ふ主人其器の凡ならさるを見て勸むるに醫こなるを以てす君大に喜び同地知名の醫師に就き勉勵せしここ二年學術進歩せり十四歲にして京都に出て某大醫に就き刻苦勉勵學益進む其後有馬、廣島、神戸等の諸名醫を歷訪せしも皆意を滿すに足らずして去り再び大垣町に來る時に年十七又先師に就き修業するここ一歲にして奧州福島市に赴き某名醫を師こし研習するここ一歲三たび大垣町に來り江馬

元齢を師として事ふ時に江馬氏參州豐橋に病院を設け之が當直員たらしめ又多く代診せしむ年二十六にして辭して鄕里に歸り一旦開業せしも思ふ所ありて再び江馬氏に就き修得すること一歳遂に歸りて業を開きぬ其初め家未だ裕ならず微々たる一村醫に過ぎざりしが多年の研究に加ふるに誠意懇切を以てせしかば數歳ならずして患者の門に集まるもの雲の如し爾來家道富裕となり遂に同地有數の資產家となり醫業亦隆盛を致せり

君平素陰德の行爲多く患者貧困なれは施療施藥は勿論往々米を與へ衣を惠み而して親切丁寧なる治療を加へしかば其恩に感泣せしもの數を知らずと云ふ其往診の如きは常に徒歩して車を用ゐず若偶々駕を命することあるも患者の村に至れは則ち車を下りて之を訪ふ是れ病家をして煩なからしめんが爲なり又同情に富み有爲の青年にして志を抱き家政の爲に空しく終らんとするものあらは之を憐み引て書生となし愛育すること子の如く費を投して勉學せしめしもの尠からず其恩惠に依り現に醫師を開業せるもの六人眞宗大學林を卒へ北海道に布敎するもの一人是れ其主なるものなり晩年佛道に歸依し商量員となる明治四十年八月年五十七にして歿す今尙其德を稱するもの絕えず

五四　江馬細香

女史は蘭齋の第二女天明七丁未の年大垣町藤江に生る母は小出氏女史名は多保又裊々と署せり字は綠玉初め箕山と號し後細香と改む五六歲の頃より畫を好み長ずるに及で京都永觀堂の僧澹空上人の弟子玉隣和尙に就て墨竹を學び兼て四君子を習ふ玉隣歿後浦上春琴を師とし花卉を學び技益々進み清姸愛すへし晩年墨俣の人澤井某の需に應し山水を畫く是より山水を乞ふ者多くなれり賴山陽嘗て江馬氏に寓せし時詩を女史に敎へ其才學を賞せり後江州の人武藤某を介し女史を娶らんことを乞ふ女史嘗て父蘭齋に誓ひ終生嫁せず文墨を樂まんことを乞ひて許さる故に山陽の聘を辭し但弟子となりて敬事す山陽も亦其志操の高きを愛し心を盡くして敎授せり後業成り鄕に還るや梁川星巖、村瀨藤城、柴山老山、柏淵蛙亭と白鷗社を

結び毎月大垣傳馬町實相寺に會合し詩文を講じ又別に咬菜社を結び鐵心、南村、研山、瓦雞の諸吟友と詩酒徵逐す而して女史は其社長たり安政三年藩主氏正公及び世子等の命を以て墨竹を揮灑して獻じ各賞賜あり是れ當時に在りては最名譽の事となす萬延元年中風症に罹り文久元年九月四日歿す享年七十五藤江村禪桂寺に葬る後藤松陰碑陰の文を撰す詩稿あり賴翁在世の時之を刊せんことを勸むれども女史謙遜して之を辭す姪荷莊に至り上木して世に行ふ湘夢遺稿是なり

女史風采清淑にして擧止温雅而して意志の鞏固なること鬚眉男子も及はざるものあり藩老鐵心の如きすら尙重大事件の生ずる毎に必ず女史の意見を問ふを常とせり嘗て大阪の人野崎松竹女史と始めて應對し是れ眞の女丈夫なりと稱し感嘆して已まざりしと云ふ

女史の父蘭齋翁は著名の蘭法醫にして江馬家中興の人なり本姓鷲見氏幼にして江馬元澄に養はる因て其姓名を冒す元澄歿後嗣を繼きて侍醫となり藩主の信任を得たり然れども翁謂らく必竟西洋醫術を修むるに非らされは素志を遂ぐる能はずと是に於て決然志を立て四十八歳にして東都に遊學し前野良澤に就き蘭學を修む爾後孜々として怠らず後獨學を以て蘭法醫書を研究し大に得る所あり是を關西に於ける西洋醫學の嚆矢と爲す寛政十年二月西本願寺門跡の病を診察して之を治し令名四方に傳はりぬ天保九年七月八日歿す年九十三細香女史を識らんと欲する者須らく蘭齋翁を識らさる可らず因て併記す

窓前雪壓玉琅玕。戲執紫毫雙手寒。二十年來苦心處。天開粉本借儂看。　江馬細香

山峰不見一尖青。眼裏唯看沃土平。萬樹風松翠濤動。金鱗出沒五層城。　同

五五　佐久間種藏

精神一到何事不成といへる語は青年輩の常に口にする所なれども眞に此語を實行し困勉苦學能く目的を貫きし佐久間種藏君の如きは稀なり

君は不破郡垂井町の人明治十七年二月八日を以て生る父を德藏と曰ひ八百屋を業とし家貧なり君十二歲のとき高等三年級を半途に退學し母に伴はれて大阪に赴き道修町の某藥店に奉公して商務に勉勵し忠實事を執り主人の爲に屬望せらる然れとも君苦學大に爲す事あらんと欲し明治三十三年十一月强ひて請ふて主家を辭し翌年京都に赴き一日醫學豫備校に入舍し傍ら資金のことに盡力せしも事皆齟齬し寄宿料を償ふに由なし父之を聞きて上洛し其負債を償還し且君に勸めて專ら家業に從はしめんとすれとも君の決心は牢乎として動かす曰く苦學は固より不肖の期する所然れとも決して妄擧をなさす必す適當の方法に因て學資を求むべければ幸に尊慮を勞する勿れと父も動す可らさるを見其意に任して歸村せり是より暫く友人某に乞ひて同居自炊す一日南禪寺内に苦學生團を訪ひ直に入團して衣類を典し約貳圓を得之を資金となし夜間饂飩の行商を始めぬ時是れ十二月中旬の頃にして朔風凛冽夜寒肌を刺す君敢て屈せす夜々車を輓き街頭客を呼び四更五更に及ひて歸團し而して收むる所僅に一圓に過きさりきと云ふ明治卅五年二月名古屋に赴き一矮屋に寄宿し某先生に通學し殆と寢食を忘れて勉學し五月名古屋醫學校入學試驗に應し佳良の成績を以て及第し茲に始めて立身の端緒を開きたり既にして某會社副支配人の同情を得て食客となり朝は内外の掃除及ひ靴磨等をなし歸宅後は子守或は風呂焚をなし夜間に我學科を勉强したり後一策を案し友人と與に城西下米野村に抵り村の壯丁を募り夜學教授を開始し以て糊口に資せり三十八年夏期より校友の紹介により熱田病院の藥局生となり事務の外に掃除等の勞に服せり此年十月陸軍衛生部依托生を出願して藥局生を辭して自炊生活を爲し四十年六月より醫學校教諭某先生の助手となり實地の研修を積み大に得る所あり且つ先生の恩顧を受け始めて復後顧の憂なきを得たり四十二年十月三日卒業證書を受領し尋て醫術開業免狀を下附せられ十一月十六日陸軍見習醫官として步兵第三十三聯隊付を命せられ守山に赴任せり時に君春秋二十有五寄語す君益勇健にして錦上更に花を添へんことを

五六　醫學博士　佐藤三吉

君は大垣藩士佐藤只五郎の第三子にして安政四年十一月を以て大垣新地に生る人と爲り溫厚にして謹直なり明治四年東京に遊學し斯波淩海の門に學び五年開成學校に入り獨逸鑛山學を修む後大阪醫學校に轉じ醫學を修め十五年四月全科を卒業して醫學士の稱號を受け尋て官命に依て獨逸國に遊學し外科醫學を專攻し伯林大學敎授ベルグマンを師として苦學の功を積むこと四星霜心を學理と實驗とに注ぎ大に發明自得する所あり二十年十月を以て歸朝し直に醫科大學敎授に任じ外科學講座を擔任す尋て內國勸業博覽會審査官に擧げられ二十四年八月醫學博士の學位を受く此歳濃尾震災あり負傷者治療の爲め同地方に出張し精勵事に從ひて功あり二十六年醫科大學長に進み三十三年勳四等瑞寶章を賜ふ爾來累進して高等官一等正四位に陞り外科學講座の外附屬大學醫院長を兼任す其患者に對する懇切丁寧にして其施術を爲す巧妙精到感嘆の外なし彼の「スクリツパー」氏は有名なる外科醫なり嘗て君を評して東洋の「ラングンベツキ」なりと賞讃せり我邦の故宇野博士は天下有名の大國手たり而して君は博士歿後の明星を以て目せらる良々以ありと謂ふべし

五七　三輪郁山

君は養老郡一之瀨村の士族桑原彌右衞門の五男にして天保七年二月生る幼名を鍋之丞と曰ふ弘化元年九歳のとき多良村三輪桂藏に養はれ貞之助と改め後貞藏と稱し郁山と號す

君幼にして讀書を嗜み書を岩手村國井春秋庵に習ふ壯年京師に遊ひ賴支峰と交り友誼厚し如何せん當時書を購ふの資乏しかりしを其頃大阪の豪商某氏藏書萬卷廣く有志の士に觀覽せしむるを以て能事となすと聞きこゝに寄寓して其文庫を通覽し三年の久しき寒暑の推移するを知らさりしと云ふ幕末に至り大垣の儒者菱田清藏を畏友とし博く和漢の書史を獵涉せり

明治五年小學校の創設せらるゝや兒童育英の任に當り傍ら郷里の子弟を薫陶せり明治二十一年十月十九日病歿す享年五十有三君平素人に語て曰く余や農家に生れ其業務を怠るは是れ本分を忘るゝなりと因て晴天に農耕を勵み雨天に讀書を樂む而して毎夜讀書に沈潜し時々深更を忘れ曉に徹することあり斯くては家業を障害することゝ少からずとし時計のなき時なれは時を知るに苦み机上の短檠に燈火を點すると同時に其上に酒壺を裝置し酒の温まるを限として讀書を止め一杯を傾け寝に就くを常とせり其博覽強記人をして敬服せしめしもの抑亦以ある哉

五八　宮川小右衛門

君は弘化三年某月を以て安八郡末守村に生る資性明敏篤實にして膽識あり幼時已に群兒と異なる所あり年二十にして衆望の屬する所となり郡奉行より同村名主を命せられ後戸長となり尋て四成村外七ケ村組合長となり再び末守村外二ケ村組合長に擧けられ明治三十年町村合併の際神戸町長に推され爾來職に在ること十有餘年公益世務の爲に獻身盡碎し一日も寧處せす其忠實にして熱誠なる感嘆の外なし在職中偶不治の症を得身苦悶を覺ゆるも敢て顧みす日々十數町を隔つる役場に出勤し未だ一日も廢せす是を以て其治績歴々として擧りしも天年を假さす明治四十年十月年六十二にして歿したり

君は町村長の外に郡會議員、名譽參事員、郡蠶業名譽評議員の任を帶び大に郡治勸業の爲に盡す所あり又國家有事の日に當りては則憂國の士となり家事を抛擲して後援の實を擧くるに汲々たりされは明治二十八年賞勳局總裁より君の功勞と善行とを表彰し藍綬章を賜はり同三十年には日清事變に盡したる功勞に對し木杯を賜はり同三十九年には日露事變に盡したる功勞に對し勳七等に叙せられ白色桐葉章及ひ金五拾圓下賜せられたり君の如きは洵に身を職事に致し斃て後已むの人と謂ふへきなり

五九　澁谷代衛

君は養老郡笠鄕村字大野の人性誠實温雅にして兼て義俠心に富み一世の公共事業之を細錄するに遑あらす率ね皆私財を投して之を處辨し敢て其費を求めす其他遠近村落又は組合等の紛議に關し屢仲裁和解の勞を執り且其費を自辨せり而して幕政時代に或は領主の命を受け或は對手相互の囑托を受け家事を抛ちて之に當り一事件數年に涉ることあるも撓ます屈せす遂に能く圓滑に局を結ふに至て止む是を以て領主より屢賞賜ありき是より名聲嘖として聞え君の仲裁を乞ふ者常に門に塡ちしと云ふ今其公共の爲に盡せし事績の二三を擧けんに

嘗て某々の間に葛藤起り對手の一人來て君の家を訪ひ喋々辨論すれとも君唯默聽するのみ某乃其意見を問ふ君乃ち答て曰く子の論旨善しと某曰く余の論旨を善しとせは何そ余の對手を說服せさると君笑て曰く對手の論旨亦頗る善し故に兩々屈せさる所以唯子のみ善なるに非らす故に子等互に讓りて論爭を止め余をして判斷に苦ましむる勿れと後某人に語て曰く代衛君は高論卓說の人を感服せしむへきものあるに非らす而かも能く他人の紛爭を絕つ余之を解する能はす然れとも其面前に至れは温厚の德光眉宇の間に現はれ言はんと欲して言ふ能はす覺えす其意に從ふと其事を處する大抵此の如し

明治維新前は堤防修築の費用を各村に於て負擔せしを以て君私貲を捐て自村の堤防を修理すること每年怠らす而して維新後日尙淺く堤防組合の制未た整はさりしを以て君頗る之を憂ひ組合を設け維持の方法を立てんと欲し奮起從事したるも紛議百出し殆と絕望に歸せんとすること數回而かも遂に能く其目的を達し今に至て輪中の人皆其先見の明と德澤を稱揚せり明治初年小學校の制を發するや君率先盡力し我別邸を校舍となし敎員を招聘し村內の子弟を薫陶せしこと數年而して其費用の如きは自ら之を辨し毫も村費に徵せさりき

或年某大官來縣し知事と養老山に遊ひ知事に謂て曰く此靈地にして此風景あり惜らくは荒敗遊ふに由なし苟も能く之を修理し天下の公園となさは獨縣下の名譽のみならす他日海外に誇稱するに足らんと知事大に感し之を郡長に語り郡長又之を君に語る君曰く余此事を思ふ既に久し唯資を得るの難き空しく今日に至る今や大

官の來遊あり好機失ふ可らすこ一日友人某に謂て曰く今や書畫の流行盛にして諸家爭ひ購ふ余も亦之を欲せさるに非らす餘財なきを奈何せん而して今購はさるべからさるものあり是れ足下等の樂しめる死書畫に非らすして活書畫なり彼雨奇晴好の養老山眞に是一幅の活畫に非らすや足下幸に一臂の力を副へよこ乃ち自ら其任に當り郡中の諸士を鼓舞し偕樂社を興し道路を開修し公園を新設し養老の面目を一新せり

君又孝順にして往年父を喪ひ哀悼して已ます母に奉するこご厚く未た曾て母に先たちて寐ねす後れて起きす閑日には膝前に小説を讀み或は妻女をして彈箏せしめ承歡以て樂こなし靄々の氣堂に滿つ晩年家計大に衰へ身亦病に罹り起臥自由ならす明治二十四年の大震災のこき家屋盡く倒潰し僅に摧殘の木材を集めて小屋を結ひ之に栖む君の長男にして出てゝ他家を繼けるもの屡貲を投し改築せんこ請へこも君肯せすして曰く汝今出てゝ他家を嗣く汝の財は他家の財なり余窮するこも他家の財を費し美屋を構ふるを屑こせすこ而して衣服飲食の如きも常に粗悪に安んじ曾て求むる所なし其の高潔にして天分に安ずる古人こ雖多く之に過くるを得ず病革まるの日家人を呼て曰く余は公益の爲め聊か盡す所あれこも家政大に衰へ傳家の産を失ふ地下祖先に對し其罪遁るゝに處なし死後必す薄葬し决して余が罪を重ねしむる勿れこ明治二十九年八月十九日歿す享年七十三後人其德を追慕し相謀り地を養老公園に卜し一大紀念碑を建設し工成り四十一年十月二十七日を以て除幕式を擧けたり

六〇　菱田海鷗

先生名は重禧通稱文藏海鷗は其號なり天保七年六月大垣町久瀨川に生る父を清次こ曰ふ皆川淇園の門人にして儒を業こなす後藩侯の侍講こなり士格に列せらる先生は其第六子にして幼より家學を修め長じて贄を安積良齋の門に執り才學煥發し嶄然儕を拔き夙に藩老小原鐵心に識られ廿八歲の頃擢でせられて藩學の教官に任せられ尋て評定役兼侍講に進み上士に准ぜらる明治戊辰の際鐵心に從て京都に在

りしとき會々伏見の役起り鐵心の子忠迪藩兵を率ゐて賊軍に在り鐵心之を聞き大に患ひ即夜(正月三日)先生に命じ往きて順逆を諭さしむ行くに臨み戒めて曰く若し聽かざれば兒の頭斬る可し大義背く可らずと先生旨を領し從者と伏見に赴き長軍の伍長某の壯丁十數名を率ひ警邏するに會し遂に縛せられて敵營に到り伍長等と論議諤々數刻に渉る此夜先生と同しく縛せられし者十有餘名悉く之を前庭に拽出し壯士輩先を爭ひて其頭を斬ること已に六名に及び先生亦將さに斬られんとす乃ち北向天位を拜し絕命の詩を賦す其詩に曰く

苦學欲酬君父恩。一燈空伴卅餘年。從容就死是今夕。只恨丹心未徹天

と字々皆熱血隊將爲に動き壯士輩を喩して其斬を止め俄に放還せり時に壯丁久保某年十七親しく其狀を睹て大に感じたるもの〻如くなりしも遂に語を交ふるに至らずして別れ急に京に返り鐵心と馳せて大垣に赴き藩論を翻し力を王事に効す功を以て特に祿百石を賞賜せらる蓋し異數なり明治元年二月京都に總裁局を設けらる〻や先生先つ徵されて史官と爲る同時に谷鐵臣、神山鳳陽、江馬天江等の諸先輩も亦皆徵されて官職を同くし文筆の事に當る然れども其筆を下すの神速にして而かも措詞の巧妙なる先生の右に出づる者なかりき十一月東京に轉任し學校取調委員を命せられ尋て待詔局御用掛となり累進して大史に至る聞く維新前後に際し宣布せられたる詔書及び令書の如き先生の起草に係りし者少からざりきと思ふに先生の大手腕を奮ひ大文字を草し最も得意の境に在りしこと蓋し此時に若くものなかるべし是より明治十八年に至るまて十數年の間官職の移動甚だ多く出て〻は福島縣に青森縣に知事となり入りては文部省書記官となり其他長崎縣に廣島縣に判官を奉職せしが如き是れ其著しき者となす十八年三月非職となりし以來復官に就かず跡を東京に留め居を窮巷に賃し帷を下して徒に授け以て糊口の資に充つ其窮困なる人或は之を梅聖俞に比し以て賢才の不遇を傷めり二十六年六月大垣に歸り嘯東館に寓し故山の風月に吟敖する傍ら鄉友の需に應して揮灑せしもの其大半は彼の伏見絕命の詩なりき以て此詩の如何に人心に感銘せしかを知るに足る先生滯鄉六旬書を請ふ者踵を接し縑紙堆を成す一日岐阜縣警部長久保誠之と云へる人

偶然来りて先生を旅館に訪ふ何ぞ圖らん此人は是れ戊辰の昔君を刎ねんとせし壯士輩の一人久保某ならんとは是に於て共に其奇遇に驚き談往事に及び今昔の感に堪へず慨然詩を賦し之に贈りて曰く

我就囚時君少年。快刀爭斬夜營前。文山不死虚名在。贏得丹心詩一篇。

と而して此奇遇に因り始めて當時先生の命を助けし隊將は萩藩の士石部誠中と云へる人なるを審にしたり然れども此人十年前已に闔棺し終に相見るを得ず乃ち又一詩を賦し知己の恩を謝す曰く

萬死得生千馬間。何圖知己有斯賢。如今涙灑終天憾。不接音容晩十年。

と先生乃ち祭資料を附し之を萩城の墓下に供し季子懸劍の意を致せり此事忽ち新聞紙上に喧傳せらるゝや增野精亮と云へる人突然神戸市より書を飛ばして曰く當時先生を縛して軍營に歸りし者は余なり此時余猶妙齢なりしと雖も其事蹟は瞭乎として目に存せり云々と因て先生は益々感慨を深くし直に書を裁し一詩を添へ增野に輸す其詩に曰く

一封奇報價連城。白髮何堪感舊情。始識洛南兵燹日。被君捕縛到軍營。

と以上の三詩は彼の絶命の詩と關聯し一つを少く可らず而して先生の面目之が爲に躍如たる者あり八月初旬を以て東京に歸る後再遊の企ありしも遂に果さず二十八年三月九日病歿す享年六十

先生人と爲り俊快剛直矯々として節を持し耿介にして苟も合はず是を以て半生を不遇に終りしと雖詩境は乃ち津々として佳處に入り流暢蒼峭咳唾珠を爲し萬首立ろに成る晩年意を彫琢に用ひ一字苟も下さず精錬して之を出だし篇々金玉而して皆實歴本色の語句々肺肝より出て琅々諷誦の際自ら感奮し其敎化に資するもの少しとせす著はす所詩文若干卷未だ世に公にするに至らず惜むべし

六一　森島簡齋

近く日用の小數を辨し遠く日月の交蝕を測るは數學の妙理に非らすや簡齋森先生早歳より關流の門に入り心を斯學に盡し深く其蘊奥を極め名聲大に著はれ四方の

子弟敎を請ふもの甚多かりき
先生名は敏昌幼名春吉通稱德左衛門筒齋は其號なり文化五年正月十五日安八郡福東村字里に生る幼にして林博敎の門に入り書史を學び後尾張藩關流大家永田有功に就き數學を研鑽し長して益斯道の玄旨に精練し帷を下し數學及ひ漢籍を敎授せしこと茲に年有り明治維新の際小學校令發布せられ自村の謹節小學校及ひ近村の小學校の爲數學巡廻敎師となり其薫陶を受けしもの尠からす又明治八年地租改正の際田畑測量法を多くの人々に敎示し自村の如きは一回にして無事に官の檢査を終了せしめたり其後門弟子は四方に招れ土地測量法を敎授し大に便益を與へたりと云ふ
門人某略々數學の奥義を極めて大阪に至り算術指南所の榜札を掲けて數學を敎授しけるに先生此事を知らす偶京都參詣の途次を以て大阪に赴き市中の散歩を試みし時不圖此榜札碑を見て我門人となることを知り面唔して曰く子の如きにして此繁華の地に指南所を掲くれは定めて時々難問題に窮することあらんと對て曰く否未た一回も遭遇せすと先生呵々として笑ひ他の談話をなして歸りしと云ふ
先生病に罹り蓐中に在るや高足森島川瀬河合の三生を召し懇篤に數學の玄旨を傳へ旣に危篤に及びて始めて免狀を與へられしには皆先生の深慮に感服したりき明治十三年二月二十八日享年七十三にして歿す著はす所筒齋算艸七卷及ひ社中算約一卷あり門人森島氏等の家に藏せり
明治三十五年九月里、福東、南波、中郷、中郷新田、福東新田の門弟及び有志者相謀りて撰文を藤權律師に篆額を南條博士に請ひて頌德碑を作り之を里村の寺院に建て師恩を不朽に傳ふ

六二　理學博士　關谷清景

君安政元年十二月を以て大垣町に生る父を玄助と曰ひ母は後藤氏家世々戸田侯に仕ふ君初め鉉太郎と稱し藩黌致道館に入學す幼時は才識の儕輩に卓拔せるを見ずと雖剛毅不撓の氣ありて勤勉人に超えたり藩醫江馬活堂蘭學を善くし夙に博識を

以て知らる君の幼少にして氣慨あるを見君の父母に語つて曰く方今時勢の推移測るべからす海外の交通日を逐ひて隆昌に赴く萬國の事情何そ通曉せさるべけんや宜しく今の時に及び洋學を修め以て世に處すべしと君時に未た弱冠ならず其言の聽くべきを知り活堂の子春琢を師として蘭學を修む當時藩侯亦大に文敎を布き洋學を奬勵せり闔藩の子弟一時翕然として之に嚮ふ而して未た數旬ならずして皆廢せり然れとも君の母氏賢明にして常に君を鼓舞激勵して息ます君亦研鑽業大に進む蓋是れ君が他年成功の基礎を爲したるや疑を容れず既にして父玄助の實兄衣斐某死し嗣尙幼なり君乃ち出てゝ衣斐氏を繼げり後正嫡の長するに及び本姓に復し名を淸景と改む

明治三年朝廷開成所を改めて大學南校と稱し諸藩の俊秀少年を徵せり所謂貢進生なり藩侯乃ち二人を選拔す一人は則ち今の理學博士松井直吉君にして一人は則ち君なり君既に東京に出て研磋愈力む同七年普通學科を卒へて專ら機械工學を修む當時君心身壯健にして勤學人に倍す明治九年文部省留學生と爲り穗積陳重等七人と遠く英國に航し倫敦ユーニバシチーコレツヂ大學に入り益機械工學を研究し精力倍奮ひ切劘倦ます居ること一年餘外邦の學友皆後に瞠若たり偶感冒を患ひ尋いて肺疾を得たり倫敦の地空氣汚惡病軀に適せず人皆歸朝を勸む君峻拒して曰く天若し予に齡を假さゞれは則ち學に殉せんのみと然れとも學友交々來り辭を盡して之を諫む君終に意を屈し同十年八月英國を出發し歸國の途に就けり歸朝後尾濃に閑居し病を養ひしが幾くもなくして神戶に移れり此地の氣候最肺患に宜しきを以ての故なり同十二年病稍癒ゆるを以て神戶師範學校御用掛となれり同十三年四月東京大學雇となり翌年助敎を經て助敎授に任ぜらる會々同大學機械工學敎師ユーウ井ング氏の工部大學校敎師ミルン氏と地震學を研究するに方り君はユーウ井ング氏を助けて機械の裝置に盡力し終に大に斯學の興味を感するに至れり君以爲へらく世界中地震學の講究に於ひて日本の如く必須にして且便宜なるは莫し蓋我か邦火脈多く隨て地震頻繁其災害尠少ならさるを以てなり予譾劣と雖奮勵以て貢獻する所あらんと遂に之を專攻學科と爲し造次顚沛之を忘れず病苦に屈せず心身を

傾注して斯學を研磨せり同十四年十一月從七位に敍せられ同十六年正七位に進む

同十九年三月帝國大學の組織成り理科大學敎授に任せられ地震學を擔當す此學の大學正科たるは他邦未だ其例を見ず其の之れ有るは獨り我が帝國大學のみ君理科大學地質科生及び工科大學造家學科生の爲に此學を講述す是れ實に地震學講義の嚆矢なり

同二十一年七月岩代國磐梯山噴火し人畜を殺傷す君報を得て蹶起し故理學博士菊池安君と倶に同地に赴き山頂噴口の一角に居を占め風雨に暴露すること月餘探究餘す所なく磐梯山破裂記を著し學者間に稱賛せらる而して病勢之か爲に大に加はれり同二十二年夏七月熊本の地大に震ふ君時に痾を護りて函嶺木賀に在り電馳東京に歸り自ら派遣せられんことを請ふ學長菊池大麓君病を危ぶみて之を止む友人箕作松井兩博士等亦切に之を諫む而して君强請して已ます官遂に之を許せり君狂喜奮躍助手を從へ南肥に赴き細に驗測をなせり而して病勢倍々加はり東京に歸ることを得ず神戸須磨の間に於て專ら療養を加ふ翌年四月非職を命ぜられ夏に至り禪昌寺に移れり寺は神戸を距る一里許八部郡板宿村鷹取山の南麓に在りて風景絕佳楓樹に富むを以て俗に楓寺と稱す且須磨灣に面して氣候溫和最も肺疾を養ふに適す此地後年君が埋骨の處となれり

同二十四年八月理學博士の學位を授けらる同年十月尾濃大地震あり人を殺傷する數千家を壞燒する數萬餘震止むことなし警報四方に傳はり人心洶々たり君時に禪昌寺に在り變を耳にし乃ち回章を作り大震後必す數回の餘震あるも恐るべきものに非らさるを說明し之を其地方に送り以て人心を鎭靜せり而して復疾を力めて輿に乘し震源地根尾谷に至らんとし山中大雪道通ぜずして還る遺憾想ふべし同二十六年四月病少快復職し震災豫防調查會委員に擧けられ其功鮮からず同二十七年六月東京地震あり君病を冒し大學地震研究室に至り大森房吉氏と諸般の調查に從事せしかは病勢再然し又禪昌寺に赴けり尋いて非職を命せらる是より優遊自適復塵事を顧みず交る所は唯寺僧と野老とのみなりき

同二十九年一月病革り八日を以て歿せり此日特に位階を進められ從五位に敍せら

る蓋異數なり遺言を以て禪昌寺の墓域に葬る

君一弟一妹あり弟を銘次郎と曰ひ明治二十七八年役に步兵少佐を以て淸國に出征し三十七八年役に步兵第三十四聯隊長を以て從軍し遼陽の劇戰に斃れたり妹を美志子と曰ひ泉法輪に嫁せり

君終生娶らす人或は伉儷を求めんことを勸む辭して曰く吾か病全癒を期す可らす吾れ人の女をして旦に婦となり夕に寡とならしむるに忍びす嗣幸に家弟の在るあり且學を攻むるには家族の煩累なきに若かずと噫君は洵に學に殉せる人なり

君風丰清挺にして資性淡泊寡言篤行頗る人の敬愛を受く而かも勤苦不屈の氣魄は毅然として存し天職を務め生命を重んじ一日も忽にせす其一肺を失ひて後尙克く二十年の餘命を享受せしもの一に之に因由せずんばあらす晩年禪を修め精神を靜養し兼ねて安心立命の地を求めたり君又鄕黨の後進に厚く皷舞誘掖貲を捐てゝ之を助け爲に學に就き業を得たるもの多し人皆其美德を稱す

六三　陸軍步兵大佐　關谷銘次郎

大佐は安八郡大垣町の人にして理學博士關谷淸景君の弟なり資性英邁剛直一度事を爲すや堅忍不撓必ず其目的を達せずんば止まず常に部下に語て曰く流水一過復不歸男子一決復不變と幼にして武に志し明治八年陸軍幼年學校に學び進んで士官學校を卒業し同十二年步兵少尉に任ぜらる同二十三年選はれて獨逸國留學を命ぜられ專心軍事を研究すること三年にして歸朝し士官學校敎官に任ぜられ將校養成に盡瘁せり明治二十七八年戰役に第二軍參謀として遼島半島及び威海衛各地の戰鬪に參畫し功を以て勳六等功五級に叙せらる爾後第六師團參謀、東京地方幼年學校長、近衛步兵第二聯隊大隊長に歷任して中佐に進み臺灣守備步兵第六大隊長となり同三十六年五月步兵第三十四聯隊長に補せられ靜岡に赴く

明治三十七年二月日露の役起るや大佐は三千の精銳を率ひて出征し五月六日淸國盛京省猴兎石に上陸せり上陸に先つこと一日部下將校を集めて曰く明日我か聯隊

は上陸地に達するの光榮を有す而して自餘の事に至りては總て是れ天命のみ予は敢て多言せず唯吾人は斃て後已まんのみ諸君其れ之を努めよと已に上陸し大佐自ら其半部を率ひ晝夜兼行普蘭店に至り敵の守備兵を擊退して鐵道を破壞し以て金州半島の咽喉を扼し尋て花兒房大沙河附近の陣地を占領し南下の敵に對して我か金州攻擊軍の背後を掩護せり六月十四日及ひ十五日得利寺の南方龍王廟附近の戰に第三師團右翼隊に屬し戰線の最大部面を指麾し優勢なる敵の攻擊を支持し苦戰二十六時間に涉り毫も屈せず遂に之を擊退し七月九日蓋平附近の戰に東双頂山以東の敵を討ちて之を退け七月二十四日より八月二日に亘る大石橋及ひ海城附近の戰に左翼に屬し衆敵を擊退し特に孫家屯北方高地を奪取して師團の左側を安全にし且第六師團の進出を掩護せり

八月二十六日及ひ二十七日右翼隊を指麾して鞍山站東方高地を占領し尙追擊隊を指麾して沙河鎭附近に於て敵に多大の損害を與へ八月三十日左翼隊に屬し首山堡南方高地の敵壘に向て攻擊せしも敵兵頑强容易に奪取する能はさるを以て翌三十

一日拂曉猛烈果敢に突擊し遂に之を攻陷せしも敵の逆襲四回に及び每回兵力を增加し我か兵死傷殆んと殫く大佐事の危急に迫まるを見るや旗手を顧みて曰く軍旗は右翼藤本聯隊に奉移すへし余は此に斃れんのみと軍旗を肅拜し再ひ部下を奮勵鼓舞し泰然一步も退かず此時不幸敵の一彈は大佐の右大腿部を貫穿す傍に在りし從卒和田平作直に之を繃帶せんとせしに斥けて曰く汝復我に關するを休めよと平然尙ほ指麾號令す然るに又もや敵の一彈は大佐の胸部を貫通し終に嚴然敵を睥睨して斃る

嗚呼大佐の忠烈無双にして大節に臨みて毅然たる者誰か感泣奮起せさらんや大佐平素溫情を以て人に接し懇切を以て士を愛し將校等の病有るときは必す往きて之を慰問し且之を其家族に報し喜憂を共にす故に部下一兵卒に至るまて其德に感し信服せさるものなかりき大佐戰功の赫々たるもの豈一朝の故ならんや

明治四十三年三月十日印刷
明治四十三年三月十五日發行

著作者　西濃聯合教育會

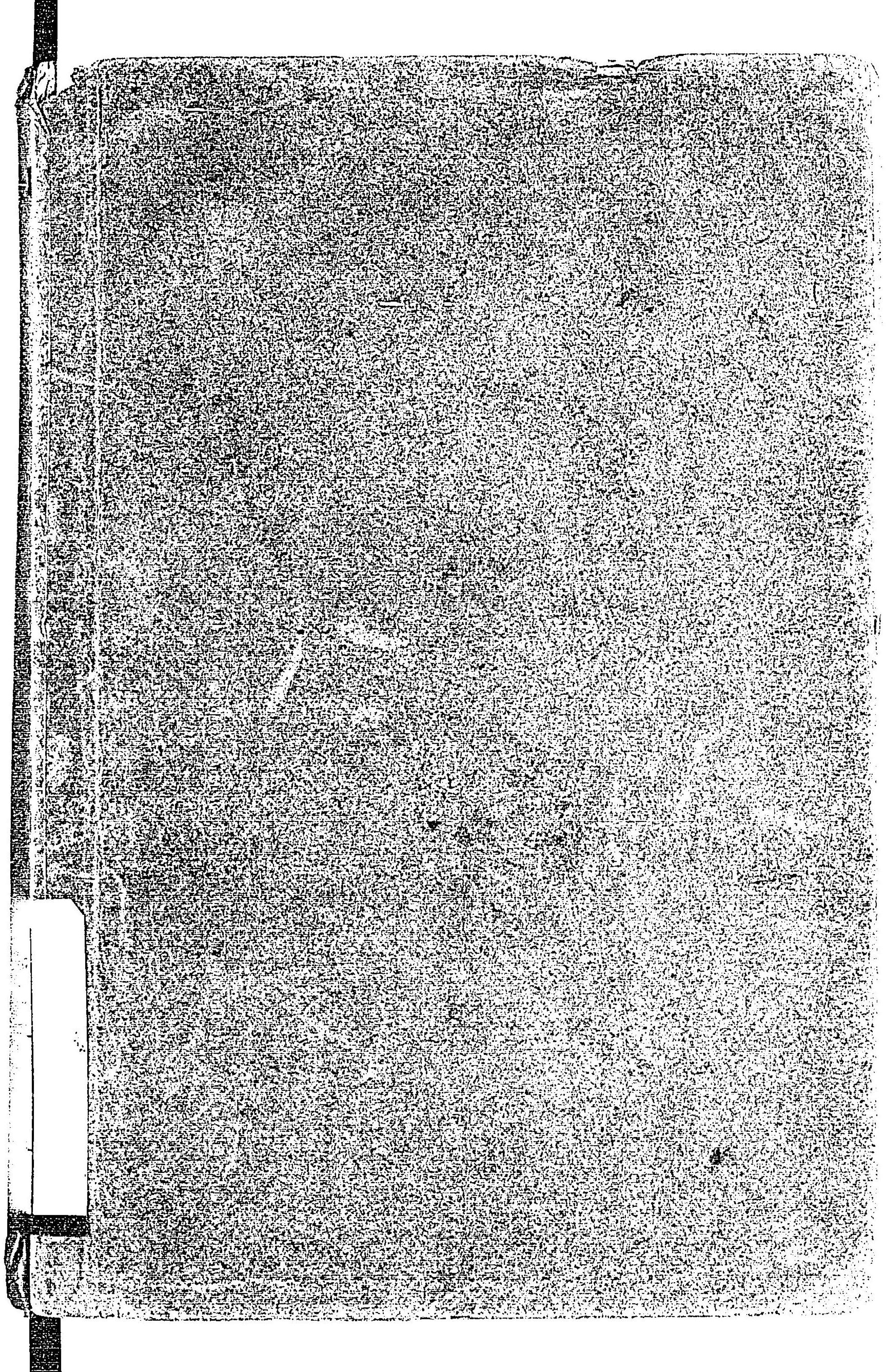
發行者　岐阜縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二
河田貞次郎

印刷者　岐阜縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二
西濃印刷株式會社代表者
河田貞次郎

印刷所　岐阜縣安八郡大垣町大字郭百五十三番戸
西濃印刷株式會社

大正十二年五月十日

東福澤志



281.53
Se121s

Ⓜ

004636-000-4

281.53-Se121s

西濃人物誌

西濃聯合教育会

M43

ACE-1255

號

養老館
文庫印